
恋姫＋無双～緋将伝～

パズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫十無双〜緋将伝〜

【Nコード】

N4150R

【作者名】

パズ

【あらすじ】

感想、ダメ出し、アドバイス、誤字等遠慮なく書いてくださると嬉しいです。

日ノ本一の兵（前書き）

最初はオリキャラオンリーです。恋姫キャラは三話から出す予定です。試作ですので書き方が変わります。試行錯誤しておりますので読みにくいかもしれません。

感想、ダメ出し、アドバイス、誤字脱字等遠慮なく書いてくださると嬉しいです。

日ノ本一の兵

大阪城。

かつては小田原城をも凌ぐ堅城として名を馳せていたが、今や外濠に内濠までも埋め立てられ城塞としては役に立たなくなった。

そして大阪城の弱点を支えた南の出城。真田丸址に男が唯、一騎佇んでいた。馬からひらりと降りたその男は精悍という以外特筆すべき事がない容姿をしていた。低くもなく高くもない背丈、美しくもなく醜くもない面立ち。

だが、どこか愛嬌がある。なんと云えばいいのだろうか。雰囲気とでもいうのか、どこことなく人を惹き付けてやまない。

彼の名は真田左衛門佐信繁。

大阪冬の陣で真田丸に籠もり徳川方に苦戦を如いらせその将才を天下に示した。

しかし、それだけだ。戦術の勝利だけでは徳川に、家康に勝てない。信繁もそれを弁えており何度も打って出る策を上申したが受け付けられずに上役達は下策といえる籠城を選択した。その瞬間、信繁の夢は絶たれたといってもいい。

だがそれでも諦めず勝利への策を練り続け、おそらくは決戦の地になるだろう南の天王寺口を下見に来た帰りに真田丸址へ立ち寄った。ここ、真田丸には上田合戦で培った馬出しの知識と経験、全てが詰まっていた。

信繁は跡形もなく壊し尽くされた真田丸を見つめながらも思ひは遠く信濃へと飛んでいた。

生まれ、育った砥石城。馬で駆けた上田平。そしてそこに流れる千曲川。供も付けずに行った別所の温泉。そして我ら真田の城、上田城。真田も最初は信州小県郡の一豪族でしかなかったが、それを祖

父様が武田家に属し小さいながらも大名にまでなったのだ。

父上は複雑怪奇な戦乱の世を弱小大名ながら生き抜き真田の名を遺した。

兄上は真田の存続の為に尽力している。

ならば、俺は？

大阪の戦を最後に戦乱は終わる。俺如きが生き残ったとてなんの意味もない。

故に、家康が首を取りたい。

父上が夢にまで見た天下分け目の大合戦を代わりに子の俺が参陣し真田の武名を鳴り響かせた。

故に、此処からは只の信繁として家康が御首を狙いたい。

只、その一心で戦い続ける。

冬の冷たい風が吹き荒び、蒸せ反る様な死臭の中。

まるで信繁の周りだけが全てを焦がす灼熱のような熱を放っていた。

元和元年 五月七日

大阪夏の陣、最終決戦の日。先日のだ明寺、誉田の戦いで豊臣方は戦将、後藤基次、木村重成、薄田兼相を失ってしまった。数少ない戦果は木村重成と長宗我部盛親が死に物狂いで井伊直孝、藤堂高虎隊を壊滅させた事と真田信繁が伊達政宗の先鋒の片倉重綱率いる騎兵隊を打ち破った事のみである。

被害は豊臣方の方が大きくもはや万に一つも勝ち目はなくなった。万策は尽き後は快く戦うのみとなり信繁は茶臼山に陣を張った。

徳川方の越前少将、松平忠直は正にこの戦で死ぬ心積もりで挑んでいる。祖父の徳川家康の言い掛かりともいえる激しい叱責で傷ついた誇りを無視出来る訳がなく面当てに死に物狂いで働いてみせると意気込んでいた。

霧の中、夜の内に茶臼山の南に陣を敷いた忠直は夜明けと共に物見を出した。

この忠直の部隊の前面に、小高い丘がある。数名の物見の兵が、まず駆けのぼってみて、あつ、と叫んだ。

この時、丘から北の茶臼山に真田信繁の陣営がのぞまれたのだ。

見る見る吹きはらわれてゆく霧の中に、朝の日がさしこみ茶臼山の、真田の赤備えが姿をあらわした。

紅の旗、吹貫をあたかも躑躅の花盛りの如く群れなびかせたようだった。

そして昼前に戦の火蓋は切って落とされた。真田隊はじりじりと進んでくる松平忠直の軍勢を引き付けながら伝令を送る。

内容は天王寺口で信頼出来る唯一の将、毛利勝永へと家康が本陣への突撃の援護の要請。

真田の赤備えの総勢三千五百が信繁が青竹の指揮杖を颯と打ち振ったのを見た。

真田隊の前衛陣地に立ち並んでいた赤の戦旗が左右に分かれる。その中央から、松平の軍勢が坂をのぼってくる。

大阪城の南面の戦場に、戦闘の響みと叫喚が高まり、展開してゆく。敵味方の兵士が入り乱れ、槍を使い、敵を目がけて叩きつけ、突き入れる。

戦乱を飾る最後の戦が幕をあげた。

戦が始まり早数刻。

豊臣方の前線の兵を崩せない事に苛立った家康は本陣を押し出し前線近くの高処に構える。

家康は戦況を見渡し、思わず息を呑んだ。

赤い部隊が松平軍を引つ掻き回し圧倒している。

更にそれを支えるように毛利隊が突き進む。乱れ立った松平軍を一気に突き破り家康がいる本陣へとひた走る。本陣の低い丘の下にいた約五百の家康の旗本たちは、真田勢のあまりに猛烈な攻撃に、大御所の徳川家康の身を護ることさえ忘れてしまった。

赤色の魔神の一隊が旋風のごとく襲いかかってくる。それだけで三河以来の武勇を誇る、家康直属の戦士たちが半里も一里も逃げ散ってしまった。家康は命からがら部下の馬で逃げ出した。

敵の本陣に突撃し馬印をも倒して家康の首級を挙げんとした真田隊は散り散りになり信繁の供廻りも既に十騎に満たない。

それでもなお家康の後を追う。僅か、僅か一町先に家康の騎馬が走っている。信繁は更に馬の速度を上げた。

もはやハッキリと家康の背を目視できる。しかし快進撃は此処までだった。

あと半町という処まで追いついた時、敵の酒井、内藤、松平の諸部隊が体勢を立て直し信繁の前に立ちはだかったのだ。

前曲の鉄砲隊が火縄に火を着け、信繁に狙いを定める。

轟音が鳴り渡り信繁の供廻りが己が身を投げ出し盾になった。皆、真田の旧臣で信繁の無茶な戦に付き合ってくれた忠臣達だ。全員笑って逝った。故に信繁は思う。負ける戦ではなかった。ただ……ただ、俺が総大将じゃなかった。最早、これまでだが、真田の意地を魅せてやろう！

たった一騎の突撃。

鉄砲隊が再装填する前に突入する。

敵は侮っていた。たとえ赤備えといえど一騎で何ができる。押し包んで討ち取れ、と気楽に命じた。

だが、信繁は鉄砲隊を突き抜け槍衾をかいくぐり、騎馬を打ちのめし停まらない。

敵勢はようやく思いだす。赤備えの恐ろしさを。

鎧を血染めで更に紅くした吼えるように叫ぶ一騎の鬼神から足輕は逃げ出し旗本は恐れ慄き浮き足立つ。

前軍の酒井の部隊を突破し中軍の松平の部隊のと真ん中まで駆け抜ける。

だが、もはや信繁は満身創痍だ。手に持つ十字槍も片刃が折れて片鎌槍に為り下がり騎乗していた馬も限界を迎えたのだろう。松平隊の槍衾を回避出来ずに斃れる。だが、それでも馬から堕ちて膝をついた信繁を討ち取れない。槍兵が八方から囲むが皆恐怖していた。この赤い鬼神は何故未だ動けるのか。左腕は鉄砲に貫かれ既に動いていない。右足は落馬の衝撃で折れたのか引き摺っているのに。鎧の下衣は己が血を吸って真紅に染まっているのに。

何よりも……何よりも恐ろしいのはその瞳。死に瀕しているのに関わらず轟々と燃え滾る闘志を顕すかのように爛々と輝いているその瞳。睨まれただけで黄泉へと渡ってしまうかのような迫力がある。信繁は重たい身体を引きずるように、されど確実に進み始める。

槍は未だ折れず気炎は尽きない。

進む 渾身の力で槍兵の囲いを破り

進む ただ前へ……ただ前へ

進む 踏み出すその瞬間。鉄砲の一撃が胸を貫く。それでも停まらない。

進む 槍が腹を貫く。身体から力が抜けていく。信繁は此処までと微笑み、己を貫いた敵兵に囁く。

我が首を以て手柄にせよ、と。そこで真田左衛門佐信繁は静かに微笑み、瞑目した。

後に様々な人物にその活躍は綴られる。その中の一つ。島津忠恒が伝聞し語った話しに全てが詰まっている。

五月七日に、御所様の御陣へ、真田左衛門仕かかり候て、御陣衆追いちらし、討ち捕り申し候。御陣衆、三里ほどずつ逃げ候衆は、皆みな生き残られ候。三度目に真田も討死にて候。真田日本一の兵。古よりの物語にもこれなき由。徳川方、半分敗北。惣別これのみ申す事に候。

これにて真田信繁の物語は終わりを迎える 筈だった。正史から外史と呼ばれるあり得ない世界へと続く。未だ戦いは終わらない。

後漢 光武帝劉秀が興した王朝。優秀な政治家だった彼女を以てして帝による完全支配はできなかった。妥協策の大豪族を官に就けて制御する方法を採らざるをえなかった。しかし帝が変わるにつれて幼帝が続き外戚と宦官が争うようになり勝った方は国政を私物と化し私腹を肥やした。そして宦官が国政を握り自分たちの権力を確固たるものにする為に朝廷の知識人を追放した。これが党錮の禁と呼ばれ乱世の序章だった。

後漢末期の青州東萊郡曲城県の屋敷には二人の人が暮らしていた。王婆という老女と王基という十二歳位の男子が過ごしていた。王基は五歳の時に両親を亡くして祖母の王婆と暮らしていた。僅か七歳にして身の丈以上の棒を振り回し王婆が何処からか連れてきた果下馬を乗り回していた。これには王婆も驚きこの子の異質に気付いた。だが、それ以上にこの孫を愛していた。

なによりこの世界の英傑は皆、女だ。秦の始皇帝も呂尚も張良も楽毅も呉起も皆、女である。男で英傑と呼べる者は存在しない。そんな不文律を皆、信じている。勿論、王婆もそう思い王基は少し早熟な子と結論付けた。

そんなある日の食卓。王基と王婆は質素な食事を摂っていた。そして早々に食べ終えた王基が何気なく話し始める。

「今日は良い天気だ。婆様、俺は海に行ってくるぞ」

「ええ、ええ。暗くなる前に帰ってくるのよ。それと安国君も連れて行ってあげなさい」

了承を貰うとすぐに厩舎へ向かう。残月と名付けた果下馬　大きさは五尺程（115cm）の小型種だが六尺九寸程（160？）の王基には問題ない。馬を曳きながら隣家へ歩く。隣家の武安国は王基より年上の十三歳の男の子だ。何かと王基に対抗心を燃やしてつかかってくるが全てすかし、いなされて相手にされない。それが更に気に入らないという悪循環をしている。

「やあ、安国！　海に行くぞ。一緒に来い」

「またお前か！　俺は行かないぞ！」

家の中から出てきた男子は身長七尺（162？）のいかつい顔つきをしている。武安国の家の親父は北海国の相、孔融に仕えている武官の為に大抵不在である。

「ほう……来ないのか。せつかく残月に乗せてやろうと思ったのに」

「えっ！　し、しょうがないな。じゃあ付き合ってやる」

この時代馬は貴重な軍需品の為に平民は馬を持つこともできなかった。武安国の家も貧乏ではないがかといって残月ほどの名馬を飼えるだけの録を貰ってはいない。

「さあ、それでは参るぞ」

「ああ、約束は守れよ！」

王基達の住んでいる曲城県からは五刻（75分）ほどで海に着く。王基は大陸の雄大な自然が大好きだった。海を一日中眺める時あれば山に籠ったりと好き勝手にやっている。

「なあ、海に何しに行くんだ？」

「うむ、今日は塩でも造ってみるか。よし、粘土を集めながら行く」

「塩って……お前、塩は専売制つてやつなんだろ？ 役人に捕まっちゃうよ」

「そうだ。武帝の時に決まった法には塩と鉄は国が管理する事になっているが今は誰も守ってはいないし俺らが砂浜で何かしてても砂遊びしてる餓鬼と思われるだけだ」

残月にくくりつけておいた袋に粘土を詰める。粘土探しのために普段使っている道を外れていく。水を弾く粘土を武安国と一緒に探しては袋に詰める。更に王基は木の棒で兎を狩り木の棒にくくりつけて進む。気がつけば既に十刻（約150分）は経っており隣の黄県の村まで来てしまった。武安国は疲労と不安が入り混じり王基は粘土がたんまり入った袋を上機嫌にみていた。

「見る安国。これだけあれば塩田が作れるぞ」

「なんでそんなに元気なんだよ……俺よりも動き回っていたのに」

「なんだ、疲れたのか。ならば飯にしよう。うむ、あそこにしよう。美人の女性だと良いな」

「お前本当に、女好きだな。皆、王家の若君はませているって噂してるぞ」

「男子たる者、女子をつかまえないでどうする。男の道理よ」

彼らは刃物を持っていないから兎を捌くことも出来ない。そこで王基は一番みすばらしい家を選び戸を叩く。

ガンガンと音が響き中から美しい金の髪はどこかやつれた女が出てくる。

「はい、どちら様ですか？」

「俺は曲城の王基と申す。こっちは武安国。兎を狩り野草を摘んだはよかったが調理する道具がないのです。ぶしつけだが道具を貸していただけないか？ 勿論、貴女の分の飯も用意させていただきます」

「ふふ、私は太史恪。若いのに随分と立派な子ね。分かったわ。でもお願いが一つあるの」

「なにか？」

「私の娘の友達になって欲しいのよ」

「断る。一飯の為の友などなんの意味もない……が、貴女の娘が飯を食いたいなら手伝ってもらおう。働かざる者食うべからず」

王基の言葉に萎れていた太史恪はパツと花が咲くような笑みを浮かべて奥に娘がいると言って水を汲みに行くと井戸へ行ってしまう。それに武安国と残月もついていく。中々に古い家に入る。部屋には物が少なく寂しい。その中に弓の手入れをしている女の子がいる。

「なんだお前は？」

私は太史慈。この家の長子だ」

金紗の髪に碧眼のまるで人形のような少女。彼女は腰まである長い髪をなびかせなんとも尊大に名乗った。王基と同年代であろうにもかかわらず不思議と貫禄に充ちていた名乗りに王基は好感を抱き微笑みながら訊ねる。

「俺は王基。太史恪殿に料理のために場を借りた。さっそくだが手伝ってもらえるか？」

「断る。私は弓を持つ方が好きなのだ。料理は好かん」

「くっ……はっはっはっ！　太史慈！　弓だけで何ができる？　お前のそれを匹夫の勇というのだ」

「お、お前！！」

王基の言葉は太史慈の逆鱗に触れた。激昂した彼女は殴りかかるが王基はその手を絡め捕り組み伏せる。

「どうだ。弓だけではどうにもならんだろう？」

「バカ！！　バカ！！　お前に……お前に何が分かる！？　こんな田舎では私塾もない上に豪の者もない！　だから私には弓しかないんだ！　これで……これで、母上に孝行するんだ！」

「……孝行か。樹静かならんと欲すれども風止まず、子養わんと欲すれども親待たざるなり。往きて見るを得べからざるは親なり、か」

泣き叫ぶ太史慈の言葉に自然と風樹の嘆と呼ばれる孔子の言葉を呟く。王基は既に両親を失っている。だからこそ太史慈の孝行の気持

ちにうつたれる。この家は見た限り片親のようだ。生活は楽じゃないだろう。

「ならば、俺の家に来い。書物もあるし働き手が欲しかった。母親も連れてこい」

「それは哀れみか！ 私に施しは受けない！ 如何に貧しくとも誇りは捨てない！」

「小人の誇りなど捨ててしまえ。それにこれは施しではない。貸しだ」

太史慈は戸惑った。今までこんな人間に会った事などない。父は物心ついた時にはいなかった。村の人間は金の髪を持つ私達を邪険にし差別と迫害においやられた。金の髪は中原ではよく見るが青州の片田舎では滅多に見ない。わかりやすい異端というわけだ。こいつは氣にくわないが言ってる事は至極正しい。学がないと時代に吞まれるだけだ。

「……分かった。よろしく頼む。母上には私が話す」

「では、料理だ。俺は兎を捌くぞ。太史慈は野草を切れ」

近くもなく遠くもない距離感が二人にはあった。友でもなくされど敵というほど離れてもいない。そして武安国と太史恪が持ってきた水を用いて作った兎肉と野草の汁物に舌鼓を打ち皆が満足して食休みしている時に太史慈が切り出した。

「母上、お話しがあります」

「なあに？　改まつて？」

「この王基殿は働き手を探していたようで私達を雇いたいと……勿論、衣食住は用意してくれるとの事です」

「それは……本当かしら？　いえ、私達のような者を雇うなど正気じゃないわ」

「太史恪殿、さぞお辛い生活を続けてきたのでしょう。しかし、俺は同情などで雇いたいと言ったのではないのです。貴女の娘は素晴らしい逸材です。その逸材が花開せず散るのは惜しい。故に投資です。いつか返してもらえばそれでいいと言う訳です」

普通ならば、こんな子供が？　あり得ないと一蹴する話だが子供とは思えない真摯な語り口と雰囲気信用してもいいと思い始めた。細々と畑を耕し狩りをして生きてきたがそろそろ限界かもしれない。

どうせこの村にいても緩やかに死ぬだけなのだから

「分かりました。よろしくおねがいします。王基殿」

「よし、ならば早々に家に行くぞ。荷物は最低限でよい」

数刻で用意を済ませて残月に荷をくくり歩き出す。

王基　真名を幸村。

遙か遠き旅路を歩き始めたばかりの十二歳の夏の日の事だった。

曲城の王家には手紙を書く老婆がいた。王基の祖母の彼女は王婆と呼ばれていたが本名は王允、字を子師といいかなりの名儒であり、かの郭泰には王佐の才と言われる程の者だった。本来ならば三公がそれに準ずる者になってもおかしくない彼女は官宦の罫に嵌まり官を辞して故郷の青州に戻ったのだ。

しかし彼女を待っていたのは荒され死屍累々の村と見る影もなくなつた娘夫婦だった。

だが孫がいらない。一抹の希望を抱き孫を探す彼女は死体を確認していく。いない。が、賊の死体が動く。思わず構えてしまう王允には見えた。賊の下から這い出そうとしてる子供の姿が。

そして話を聞き驚愕する。僅か五歳の孫が賊の頭目を不意打ちで討つたというのだ。頭目を失つた賊は同士討ちを始めて逃げさり孫は死体に押し潰されて身動きが出来ずに居たところ人の動く音がしたから這い出そうとしたらしい。

なんとも我が孫ながら末恐ろしいが乱れ始めた世の中には必要なのかもしれない。

王允は孫を　王基を連れて東萊郡曲城県に移った。

そして馴染みの商人から譲り受けた果下馬や様々な書物を与えてきた。この乱世では誰もが例外なく厄介事に巻き込まれるだろう。いつも人の中心に居るあの子が巻き込まれないはずがない。

それでも、孫には幸せになつてもらいたい。孫の為に昔の友に、上司に助力を請い財を蓄え情報を集める。

戦乱の暗雲は確かに彼方まで迫っていた。

塩鉄論（前書き）

先ずは、東北地方太平洋沖地震で被災し亡くなられた方のご冥福をお祈り申し上げます。また、今現在も困難な状況に置かれていらっしゃる方に心よりお見舞い申し上げます。

自分は関東在住のため計画停電の影響で更新が遅くなります。

塩鉄論

真田信繁の半生は人質生活だった。最初は上杉に、それから豊臣へと移った。だが信繁は何処にどんな立場だろうが闊達に礼を失せず、に過ぎた。そんな信繁を上杉景勝も豊臣秀吉も気に入っていた。景勝は人質である信繁に領地を与え、大阪に移る時も盛大に送り出した。秀吉は豊臣姓を与え従五位下左衛門佐に叙任させ傍に仕えさせた。

信繁は各地で熱心に学んだ。最初は信州で、真田の謀略、武田の軍略、越後で上杉の勇略、大坂では豊臣の人略を己が物にしようと必死だった。斯くして真田信繁は日ノ本一の兵と称されるほどの侍になる素養を身につけた。

そしてそれは王基となった今も脈々と流れている。

曲城の自宅に着いた王基は武安国と別れた。まず王婆の部屋へ太史親子を連れて行った所、王婆は一目で二人を気に入り客人としてもてなした。

後は大人の話と部屋を追い出され王基と太史慈は書庫へと来ていた。ずらりと並んだ竹簡が棚に詰まっている。孫子、左氏に史記、六韜、韓非子、老子などの様々な書物が二冊ずつ置いてある。一冊は王婆が持ってきたもので、もう一冊は王基が写して注釈を付けたものだ。

「さて、太史慈。何を読む？」

「……お、王基。そ、その、私は字が読めないんだ」

恥ずかしそうにうつ向いた太史慈に王基はそれがどうしたとばかりに返した。

「なにを恥じるのか、産まれたときより字を解する者はいない。真に恥じるべきは学ぼうとしない性根だ」

その点、お前は立派だと王基は締めて奥の竹簡を持ってくる。

「最初は　六韜からいくか。呂尚の兵法書だ」

王基の教え方は巧かった。なにより面白い。太史慈はほんの少し字を覚え王基から毎晩に字を教えると約束を結びこの日は床に着いた。

次の日、王基は武安国と太史慈を連れて再び海に来ていた。まずは盛り土をして土台を築く。これが中々に手間取る。並以上の体力を持つ王基と太史慈と武安国でさえ夕方まで必死に土を運びようやく盛り終わる。

「なあ、これも塩を造る為なのか？」

「そうだ。時に一粒が命より重くなる魔性の粒よ。さあ、しっかりと働け、武安国。お前は帰りは残月に乗るんだろう？」

「そうだけどさ……塩って海水を煮れば出来るんだろ？」

「うむ、だが、質も量も悪すぎるそれでは意味があるまい」

きりの良いところで作業を止める。武安国は残月に乗って帰っている。あっという間に駆けていく馬影を見送って帰り道を歩みながら

これからの工程を考える。背中には疲れ果てた太史慈を背負い暗くなり始めた道をしっかりと進みだした。

次の日、また海へとやって来た王基達は、盛り土の上に粘土を敷き始める。昼過ぎには終わらせ今度は夕方まで粘土の上を踏み固め細かい砂を撒いていく。

「で、出来たか？　私は弓はどれだけ射とугが疲れないがこういうのは駄目なのだ」

「うむ、完成だ。だが明日の方が辛いぞ。ほぼ一日かかるからな」

それを聞いた太史慈はふらつと尻餅をついてしまう。それを王基は背負って歩きだす。武安国は既に残月に乗って駆けているだろう。王基の手伝いの報酬だ。

「その……すまない。私は足手まといだな」

「なに、武安国を背負うのは臭くてイヤだがな。お前はいい匂いがするからイヤじゃない」

「なつ、ななつ！　　嗅ぐな！　　馬鹿者！」

夕陽に照らされた一つの影と二つの声が賑やかに帰路に着いた。

翌日も海に来た。この日は残念な事に曇天である。揚げ浜式塩田の大敵は雨だ。無論、王基もそれを知っている。それでもやってみて成功したら笑い、失敗しても笑うのが彼の流儀だ。成功からも失敗

からも学ぶのだ。無駄な事など一切ない。王基は家の箆笥を改造した沼井を背負い残月には桶と杓を乗せて自称塩田へやって来た。塩田の中央に沼井を設置し、海水を汲みに行った時に遂に曇天が泣き出した。

あつという間に前が見えなく為るほどの豪雨に変わった。天を仰いでいた王基は素早く決断した。

「荷物は捨てて帰るぞ。急げ！」

「良いのか、また造るのではないのか？」

「もう駄目だ。なにより命の方が大事だ」

雨といって侮ると命に関わる。雨に打たれるだけで体力は落ちて体温は下がっていく。下手すると家路の途中で力尽きるかもしれないのだ。

「武安国、お前が残月に乗っていけ。俺達は走る」

太史慈はまだ馬に乗れない。そして武安国と王基、体力があるのは王基の方であり、理は王基に有る。

だが、だからこそ武安国はそれが気に入らない。故に反抗してしまう。

「お前が乗れよ。俺は走れる！」

「む……ならば太史慈。お前が乗っていけ。乗って掴まっているだけで大丈夫だ」

「っ！ ……分かった、先に行くぞ」

武安国の感情を王基はよく知っている。真田源二郎だった時に幾度も味わった辛苦。英傑の父と兄に追いつけない苛立ちという名の嫉妬。

その感情を今王基はぶつけられている。その応え方は一つしか知らない。否、一つしかない。

「口喧嘩など性に合わん。やるならコイツだ。かかってこい安国男子だろう？」

拳を突き出した王基の余裕が更に武安国の理性を削る。雨ですぶ濡れの身体が燃え上がるかの様な激情に揺られ王基に殴りかかる。拳が交差する。

ドゴツと鈍い音の後に二人は吹き飛んだ。立ち上がりまた殴り合う。防御などかなぐり捨ててひたすらに殴る。これは闘いではなく喧嘩だ。相手を一方的に殴るのではなく対話のように殴り合う。

延々と続くかと思われた殴り合いは一刻（15分）程で終わった。王基の渾身の右の拳の一撃に耐えきれず武安国は倒れた。二人とも顔は膨れあがり拳も擦り切れている。

勝った王基はふらつきながらも武安国の方を一瞥もせず身体に鞭を打ちゆつくりと家路に着く。

今、武安国は男子から男になろうとしている。必要なのは少しの間と背を押してくれる誰かだろう。それは決して王基ではないのだ。男子は時間と共に大人になるが漢には為れない。男子から漢になるには意地がある。自分の裡に真っ直ぐで、強靱で、しなやかな芯を通す者を漢というのだ。

ふと、安国に構いたくなる理由が分かった。

どこか大助に似ているのだ。大助も童の時から喧嘩しながら育てた。大坂に入る前に叔父の所へ行かせようとしたが従わずに着いて来た大馬鹿者。

回顧しながら苦笑して道を歩く。頬を伝うのは雨だろうか。それは王基にすら判らなかった。

王基が去つてすぐに雨がやみ太陽が雲の切れ間から顔を出した。武安国は倒れて空を視ていた。弱くなった雨が火照った身体を冷やしてくれる。すっかり嫉妬や苛立ちは吹き飛んでどこか清々しい気持ちで胸を満たす。

負けた。王基にだけは負けたくなかった。自分より年下のくせに知勇に秀でた王基を認められなかった。鬱屈した感情を秘めて王基に付き合っていた。だが、今はどこまでも清々しい気分だった。王基の一撃は百の言葉よりも心に響いた。

「俺は俺であいつはあいつだ。今は及ばなくても」

いつの間にか雨は止み雲間から覗いた青空に虹がかかっていた。

家に帰り着いた王基を待っていたのは太史恪の説教と太史慈の無駄に痛い治療だった。説教も程々に太史恪は夕食の下拵えに戻って行く。

「太史慈、痛いぞ」

「自業自得だ！　しかし派手にやったものだな」

「安国も俺も不器用だからな。手加減などではしない」

「まったく、男はすぐに殴り合いだ。馬鹿なのか？」

「ふふつ、殴り合いではない。喧嘩だ。言葉よりも雄弁に語り合える」

太史慈の馬鹿につける薬はないという視線を一身に受け少し居心地が悪くなるが救いの手は意外なところから差し伸べられた。

「若様、王婆様がお呼びですよ。お客様も来ていらつしやってるから服も着替えた方がいいですよ」

「おお、すぐに参る」

太史慈の言葉に王基はこれ幸いとばかりに自室へ逃げ込んだ。今まで着ていた粗末な単の服を脱ぎ、正装に着替える。

この時代の服は何故か洋服に近いものがある。服だけならば真田信繁がいた時代よりも進んでいるだろう。

王基はどこかちぐはぐなこの世界が三國志を基にしていると気付いていたが気にもしない。何故、自分が此処に生まれ変わったのかなどどうでもいいのだ。人生に筋書きなど必要ない。だから王基は時間任せ三國志の物語を忘れた。というより殆ど知らない。豊臣、武田、上杉、織田など真田信繁の時代には憧れた英雄が大勢いた。過去の、しかも異国の英雄の話よりも断然興味があつたのだ。

そして今はただ、ただ日ノ本よりも雄大なこの世界が、国が、村が好きだった。

「失礼いたす」

「ああ、衛弘殿、これは孫の」

「王基と申します」

「これは、これは、衛弘と申します」

王婆の部屋で王基を迎えたのは王婆と太った中年の男だった。挨拶を交わしながらのことのない世間話に興じる。松花江の魚の話や詩の話で賑わい食事を運んできた太史親子も巻き込んで宴になった。王基が音頭をとった飲めや歌えやのドンチャン騒ぎに最初に太史慈が潰れ、次に太史恪も潰れた時には宴もたけなわと王基は太史親子を担ぎ部屋を辞していき、部屋には王婆と衛弘のみが残った。

「悔しいですが、値を付け間違えましたな」

「河南一の豪商と言われる衛弘殿でも値を間違えるのですね」

「私はどんな物でも人でも一目見て値を付けます。この二十年、外した事はございません。若君は最初は安物と見えましたが話し、共に酒を飲めば素晴らしき男振り。いやはや、本物でしたな。いや、悔しい。王婆様、彼が起つ時は御一報下さい」

「随分と王基めに惚れ込みましたな」

「久しぶりに美味しい酒をいただきました。王基殿と飲む酒は美味しい。これだけで援助するには十二分な理由ですよ」

衛弘は生粋の商人である。過去に大恩ある王允の孫だろうと冷酷といえる程、情を交えずに値を付ける。値とは即ち、将来性と言ってもいい。しかし衛弘はそんなものを無視してでも王基に援助してもいいと思ってしまった。

曹家の娘のような進る才覚を感じた訳でもないが死んで欲しくない
と、そう思ってしまった。

王婆と衛弘は乾杯をする。やはり今日の酒は一段と美味かった。

武安国は王家の前に立っていた。喧嘩からは既に一日経っている。王基と会って話したいが考えれば考えるほど何を言えればいいのかわからない。

「あら？ 安国君じゃない。どうしたのかしら？」

「太史恪さん……いや……王基、いますか？」

「うーん、多分自室に居ると思うわよ」

「そう……ですか」

どうしても一步が踏み出せない。

動け！　動け！　と必死に己を叱咤する武安国の背中を太史恪は優しく押した。

「頑張りなさい」

武安国は優しさに押され驚くほど軽く一步を踏み出した。

また一步

また一步

王基の部屋に近づいていく。なにを話すかなどまったく定まらない。だが足は止まらない。

また一步

また一步

部屋の前の扉に手を掛ける。まずは謝ろう。そうきめて入った部屋には王基が座して瓢箪で作った徳利と盃を持っていた。

言葉が抜け落ちていく。謝罪の言葉も何もかもが。何も言えずに王基の前に座る。

沈黙に包まれながら王基は酒に満ちた盃を武安国に差し出して淡く笑い言った。

「飲ろうか」

知らず武安国は泣きそうになった。初めて認められた様な気がしたのだ。今までは子供扱いだったのがようやく対等な男となれた気がした。

ただ無言で酒を酌み交わす。言葉など要らない。交わした盃の数が、

心地よい言葉になる。

この日から武安国は変わった。言葉遣いを改め昼は双鎚の修練を積み夜は学問に励み時々王基と酒を酌み交わした。王基も昼は太史慈と修練し夜は太史慈に学問を教える。そんな生活が二年程続いた。

月日が過ぎる中、王基の身の丈も七尺九寸（約180?）にまで伸び堂々たる偉丈夫に成長していた。

武安国も八尺もの巨軀に成長していた。しかし今は北海の孔融に仕官している。王基も誘われたが断った。仕えるのなら己が目で見極めなければならぬ。安国がいなくなると殆どの時間を太史慈と過ごしていた。

「王基！ 今日こそ私の矢を当ててやる！」

庭で対している太史慈も今や少女と言うよりは女というのがふさわしい。豊かな胸に引き締まった四肢も、相まってそこはかとなく色気を醸しだしている。

しかし、東萊郡では いや、青州では彼女を口説く男は少ない。一年前の事件で太史慈は名を青州に轟かせた。

一年前、州と郡の役所がいさかいを起こした事が発端だった。話し合いでも決着がつかず漢朝廷に上奏し裁判してもらうことになった。この時、州の役所は先んじて上奏の使者を出していた。何故ならば先に上奏した方が有利になる。というよりはどちらが先かで裁判の勝敗が変わってしまう。

慌てた郡の役所は遅れじと使者を出そうとしたが奏曹史の役についていた者が逃げた。州の妨害を退け更に先に出発した州の奏曹史より先に上奏せねばならない。そんな事できやしないと諦め、責任を押し付けられる前に逃げ出したのだ。

困り果てた役人が王基の話を聞き付けて王家にやって来たが王基は

その時、安国と共に衛弘のもとへ出向いておりいなかった。

頂垂れた役人は王婆に泣きついた。そこで王婆は孫はいないがその役目を果たせる者がいると太史慈を推薦したのだ。

役人はまだ若い女性の太史慈を信用できなかったが暫定的に奏曹史の役に就けて洛陽へ送りだした。

昼夜兼行で旅路を急ぐ。途中、州に雇われたと思わしき賊を弓矢で撃退し洛陽に着いた時、丁度州の役人が取次ぎに出ている所へ出くわした。もう間に合わないとみた太史慈は搦め手を用いた。

州の奏曹史に近づき、あたかも州の役人に言われて来たとはかりに上奏文に間違いがある事を告げる。慌てて上奏文を取り出した奏曹史から太史慈はパツと奪い破り捨てた。

そして抜け抜けと笑顔で、やはり間違っていた。こんなものを上奏しては罪に問われる。州に一度、確認してくるから待っているといい、そう言つて州に戻るフリをした。

そして悠々と郡の上奏文を上奏し郡に有利な処分を引き出したのだ。このことにより州役所の恨みを買ったために王家に刺客が差し向けられるが全て太史慈と王基が討ちとった。

この一連の事件により巷では太史慈の事を王家の金鷹と持て囃したと言い寄る男を太史慈は全員打ちのめした。そのせいで太史慈を口説こうとする男はいなくなってしまった。

「太史慈よ。待て、待て。髪を梳いてからだ」

「む、むう」

庭で太史慈の髪を梳く。この二年間ずっと王基が梳いてきた。最初は気まぐれに始めたがこれが中々に楽しい。梳櫛を自作して椿の種から椿油を造りだしてまで金紗のような髪を愛でてきた。腰まで届く長髪はキラキラと輝き王基を魅了する。

「もういいだろう！ さあ、勝負！」

「仕方ないな」

苦笑し再び庭で対峙する。太史慈は鏃のついてない矢を三本、弓に番える。対する王基は無手だ。二人の間は三丈程（約10m）しかない。圧倒的に太史慈が有利だ。

矢継ぎ早に放たれる三矢。

風切り音をあげるそれを王基は身をかわし素手で掴み取る。

王基は目を、感覚を鍛え、太史慈は動くモノを射る練習になる。二年前から続いている勝負である。戦績は三百六十五勝、三百六十五敗の決着つかずだ。

「……今日は弦の調子が悪かった」

「お前も大概だな。しかももう二年か」

感慨に浸る王基はこの二年を振り返る。

この勝負の発端は王基が村の娘に夜這いをしに行こうとした事から始まった。それを見咎めた太史慈はあらゆる手段で止めようとした。口論の果てに弓矢を持ち出しどうにか止めた。

一方の王基は何故、太史慈に止められるのか分からない。日ノ本では夜這いなど日常茶飯事である。乱世に生きる男は明日をも知れぬ身なのだ。だから、積極的に女を抱きにいく。王基はその気概が芯まで根付いている。ようするに、王基は助平で女好きなのだ。

そのような王基の話で太史慈が納得するはずもない。太史慈は思春期特有の潔癖で必死に王基を止めた。それと少しだけ、王基が遠くに行ってしまう様な気がして嫌だった。

そして勝負を持ち出した。三丈離れて太史慈が三矢放ち王基に当てたら勝ち、外したら負けという単純至極な勝負。王基が勝てば太史

慈を嫁に、太史慈が勝てば王基を部下に出来ると取り決めた。先に三連勝した方が勝ちと決めたが兩人、共に負けず嫌いの上に追い込まれた時の方が力を発揮する質だ。
結局、二年間毎日勝負を行うがいまだに決着が着かない。

「そろそろ、この勝負やめないか？」

「駄目だ。お前みたいな不埒な男を自由にしたら村の女性が孕まされて泣くだろう。私はそのような事態を決して許さない」

この勝負にはもう一つ取り決められた条件がある。勝負してる期間には夜這い禁止と定められたおかげで王基は強制禁欲中なのだ。

「だがな、太史慈。俺はもう十四だし食い扶持くらいは稼げる。女の一人や二人……」

太史慈のあまりにも鋭い視線に語調が尻窄みしていく。そこに村人が血相を変えて走り寄ってくる。

「た、大変だ！！　太史のおつかあが倒れた！！」

「　　っ！」

部屋に担ぎ込まれたと聞き太史慈と王基は直ぐ様駆け出した。

部屋には寝台に太史恪が寝ており医者と王基と太史慈が傍に立っている。王婆には退室して貰った。この症状を王基は見た事がある。

「原因は分かりませんが熱があり咳が出てます。一応、いくつかの薬を出しておきますが」

「……労咳」

最初は微熱が続き、咳がでて血を吐き、死ぬ。労咳とは不治の病だ。竹中重治もこの病で死んだ。医者が去った後、王基は自室で太史慈に向き合った。

「太史慈、お前の母は長くないかもしれん」

「な、何を……ただの軽い風邪だ！　死なない！　死ぬものか！！」

しかし王基は冗談は言うが嘘は言わない。太史慈もこの二年でそれを知っている。だから縋りついてしまふ。厚い胸板に、たくましい腕に抱きしめられる。むせかえるような男の匂いが鼻孔から全身に巡り、痺れに似た快感が身体を走る。言い寄ってきた男達には全く感じなかった情感に満たされる。

「……確か、名医が洛陽にいるらしい。その人なら、もしや」

「なら、私が」

「いや、俺が行こう。お前は母の面倒を看ている。万が一がある」

ずるい、と太史慈は思う。普段はいい加減なくせにこんな時だけ優しい。きつとこいつは天性の女こました。いや、人たらしだ。

自然と豊麗に潤んだ瞳で王基を凝望する。

「私は……お前に貰ってばかりだ。返せるものなど、この身一つだ」

太史慈は王基の耳元に口を近づけて囁く。
勝負は無しだ。お前の好きにしてい。い。
王基は何も言わず抱きしめたまま寝台へ歩く。太史慈は本当に小さく、王基にだけ聴こえるように呟いた。

私の真名は安岐、お前に捧げる。

寝台へ雪崩れ込む二人を窓から覗いていた夕陽は恥じる様に地平に沈んでいった。

清々しい朝だった。久しぶりに女を抱いた。飯も食わずに朝方まで交わっていた。寝台の太史慈は今までの刺々しさがなくなり寝顔はとても穏やかだ。王基は寝台から立ち上がり身支度を整え闇を出る旅に出る事を伝えるに王婆の部屋へ赴くと無表情の王婆が座していた。

「王基……座りなさい」

「婆様、俺は」

「座れ!!」

王婆の一喝に素直に座り向き合う。ピリピリとした感覚に王基は震える。ただ、ただ、喜びに打ち震える。

自分の婆様は只者じゃない。時代に名を刻んだ者かもしれない。つまりは我が先達か。

王基は三國志の内容などすっかり忘れていたが偉人の醸し出す雰囲気

気は忘れてはいない。

「王基！ お前は人様の娘を傷物にしたのです。身体ばかり大きくなってしまつて、思慮が浅い。太史恪殿になんと詫びれば良いか」
嘆息する王婆に王基はいけしゃあしゃあと言いのける。

「詫びる必要などない。俺は抱いた女を不幸にはさせない。天帝に誓つても良い」

「ならば、成人なさい。今日からお前は字を持つのです」

「心得ました。……伯與と名乗ります」

呆れと怒りと諦めの混ぜ合わさった表情で王婆は箆笥を開けて布に包まれた棒状の物を取り出す。布を払い王基の前に肅々と置く。それを見た王基は声も出ない。

全長四尺の打刀。黒漆の塗られた鞘には、夜空に瞬く星の様な七つの宝石が鑲められている。

鞘より刃を抜く。打刀らしい本造の片刃で庵棟、身幅広めで腰反り高く踏張りがあり中鋒猪首風となる。鍛えは板目に空混じり、総体に肌立ちぎみで乱れ映り鮮明に立つ。刃文は丁字に互の目を交えて変化に富み、裏は一般と大模様に乱れる。鐔は丸形で小柄櫃と筭櫃もある。典型的な打刀拵えのそれは紀元三世紀には明らかな異質。

「福岡一文字の作……か？」

絵画や陶器といった美術品とは一線を隔す美しさ。久方ぶりに見る刀だが王基の鑑定眼は曇つてはいなかった。

「これは七星宝刀。王家の総領が持つ刀です。意味が分かりますね？」

「……分家が狙ってるのか？」

「貴方次第です。己が器を示しなさい。才無しと観られたならば命は保証できません」

「そうか、面白いな。うむ、面白い。それは医者捜しのついでに訪ねることにする」

「医者捜しですか……洛陽の王凌を訪ねなさい。彼女が貴方を認めたらば力を貸してくれるでしょう」

王基は直ぐ様、旅支度を整える。自室で必要な物を纏めていると太史慈が身を起こす。

「起きたか。身体の調子は？」

「痛い。初めてなのに朝まで付き合わされたのだぞ。だが……悪くない」

ふわりと微笑む彼女に王基はゆっくりと近づく。机から櫛と椿油と紅い織布を取り出し寝台に上る。ギシッと寝台が悲鳴をあげるが王基は構わずに安岐を正面から抱き抱えるように髪を梳く。安岐も最初はビクリとしたが静かに身を任せる。髪を梳き終えて織布で後ろの髪を括り纏める。王基が真田紐の技術を用いて暇な時に作った織布は華美で丈夫な逸品だ。

「どうだ。これなら髪が邪魔じゃないだろう？」

王基が差し出した鏡には、後頭部の髪を高い位置で一つに纏めて垂らす安岐がいた。なによりも目を惹くのが蝶のように結わえた織布だ。髪を留めるだけでなく金に映えるように主張している。

「うう……少し、可愛い過ぎないか？ 私にはこのような装飾は

」

「似合っている。うむ、うむ」

王基は満足そうに頷いた。

紆余曲折の末に旅支度を整え王基は家を出る。見送りには王婆と安岐が来た。

「なっ」

「母上！」

別れの言葉を送ろうとした王基は驚きに声をあげる。視線の先にはフラフラと覚束ない足取りの太史恪がいた。どうにか王基の前に来ると両膝をつき拱手する。

「若様。私は大丈夫ですので医者捜しなどは必要ありません」

「何を！ 何を言ってるの！ 母上！」

王基はどうみても大丈夫ではない様子の母の言葉に激昂した安岐を手で制す。

「俺は、安岐を娶ります。つまり、貴方は俺の母上でもあります」

「えっ！」

「どうか、この不肖の息子に孝行させていただきたい」

王基は膝をつき土下座をする。太史恪はその行為が偉丈夫にさせてはいけない事だと感覚的に理解した。

「わ、分かりました！ 分かりましたからどうか頭を上げてください」

王基は立ち上がり、真っ赤な顔をした安岐の前に面する。

「俺は王基、字を伯與。真名を幸村と申す。俺と共に生きてくれな
いか？」

「わた、私は、太史慈、字を……子義。真名を安岐と申します。喜んで、共に参りましょう」

そして王基は反転して道歩きだす。どこか照れ臭いため振り向かず
に声を掛ける。

「安岐、留守は任せた。それでは行って参ります」

洛陽までは徒歩で十日程だろう。

姓は王、名は基、字を伯與。真名を幸村。

彼の波乱に満ちた旅は始まりを迎えた。

くおまけ

家を出て最初の夜。王基は野宿の準備をして横になった。満天の星空と薄く輝く月を見つめながらゆっくりと眠りに堕ちていった。

ふと気がつくと思知らぬ場所にいた。王基も頭のどこかでこれは夢だと思に至った。

何故ならば見知らぬ美女が自分に膝枕して幸せそうに微笑んでいる。昨日安岐を抱いたからこのような夢を観るのだと己の浅ましさを叱咤して身を起こす。

「つかぬ事を伺うが、どなたかな？」

「私は鶴と申します。ずっと貴方をお慕いしておりました」

艶やかに微笑む女はとても美しい。十二単を着て正に日本の姫のようだ。

「うゝむ、すまないが覚えておらん。人違いじゃないか？」

「いいえ、信繁様。貴方でございます。私はようやく貴方と共にな

れました」

ぼんやりと景色が変わる。どこか懐かしい日本の閨。生々しく布団が一つ置いてある。鶴の格好も十二単から寝装束に変わっていた。据え膳である。王基は自分の好色な心を抑えきれずに鶴を布団へ押し倒し口を吸い身体をまさぐる。いつの間にか灯りが消えた閨には艶めかしい嬌声がこだました。

ちゅん、ちゅんと鳥の鳴き声で目が覚めた王基は周りを見渡す。昨日、野宿したところだと分かり残念と安堵の籠った溜め息を吐く。そんな彼をせせら笑う様に朝日が照らしだす。眠たげな目を擦り、伸びをする彼の首元には赤い接吻の痕がくつきりと残っていた。

「さて、今日も気張るか」

勿論、誰も答えない。ただ、枕にしていた刀が朝日に煌めいたのみだった。

伏魔殿（前書き）

西尾先生の速さと池波先生ばりの文才が欲しいです。あと司馬先生の知識も追加で。

伏魔殿

漢の都、洛陽。

黄河の中流に位置した大都市。

中央通りは豪華絢爛、まさしく帝の足元にふさわしい。だが一つ道を外れると貧民街が広がっている。道には骨と皮の瘦せこけた民が座り込んでいる。目も綾な情景を憂い悲しむ者は朝廷や行政には驚くほど少なかった。その数少ない憂国の士が王基が訪ねる王凌だ。叩き上げの彼女は兗州刺史、中山太守を歴任し中央に出仕した。三公の一人、司徒の袁隗に高第として侍御史に任命され、彼女は大司農の地位まで駆け上がった。

だが、宦官たちの横暴凄まじく大司農の官職は有名無実でなんの権力も無かった。最近の館に引きこもりがちな彼女は今日も今日とて読書に耽る。だが、その享樂を打ち破る使徒の足音が聴こえる。

「母様！　いい加減に引きこもりは止めてください！」

「えゝ　でもさ。正直、仕事なんか無いし。宦官が許可出さないしさ」

だからいいじゃん、と横になる王凌を見て眉をしかめるのは彼女の娘の王昶。この親子はなんと相対的である。

母の王凌は水色の髪をボサボサと背中まで伸ばして眠たげな半目。娘の王昶は母より受け継いだ髪をうなじが隠れる程度に切り揃えて凜としたつり目。

何より身長と胸が違う。王凌は六尺二寸（142？）で断崖絶壁の胸部。王昶は七尺四寸（169？）でしっかりと自己主張する胸部の双子山を有する。

母の言に焦れた王昶は遂に実力行使に出た。力ずくでも外に出して

やる、と飛び掛かる。押し合い圧し合いになるが

「あ、あの、お客様が御越しになりました。王伯與と名乗っておりますが……」

「王？」

「伯與？」

部屋に入ってきた侍女の言葉で揉みくちやの二人はようやく止まった。顔を見合わせ首をかしげる。王の姓を持っているならば会わない訳にはいかない。二人は身形を整えると客人の待つ部屋へ向かう。

部屋の中には檻褸を見に着けた乞食の様な男がいた。部屋の外に立つ王凌達にまで届く饅えた臭いに王昶は部屋に入るのを躊躇した。

「母様、あのような下賤な者など追い払きましょう」

「だめだよ　昶ちゃん。ちゃんとお話聴かないと」

王凌が部屋に入っていくのを王昶は慌ててついていく。部屋の中の臭いに辟易しつつ男を観る。その姿と立ち居振る舞いで粗野で下卑と王昶は判断した。

「え」と、貴方が王伯與殿？」

「うむ……すまないが二刻ほど（約三十分）待っていただきたい」

言うや否や男は立ち上がり家を出ていった。

きっかり二刻後男は姿を現した。二人はその変わり様に目を丸くする。

乞食同然だった男は身を清め香を焚き、仕立てのいい上等な物を着て刀を佩いた偉丈夫へと様変わりしていた。更に立ち居振る舞いまで変わってるのを見て二人は気付いた。試された、と。

「王伯與と申す」

「えゝ私は王彦雲。こつちが」

「王文舒」

尖った声の王昶にまだまだ青いなゝと苦笑いしつつも王凌は話を進める。

「君が允伯母さんの孫だね」

「然り、些か試させてもらった」

「あつはっはゝ、それで結果は？」

「上々」

試されるよりも試す方が好きな王基は乞食の格好をして訪ねたのだ。会ってもらえないのなら会う価値無しと決めたが中々の傑物だ。小さい娘の方はかなりの士だろう。母の方はまだ未熟。

「うゝん、面白いなあ。いいよ、この王凌、伯與殿を王家の総領と

「認めるよ」

「母様!？」

「母？」

ありえない事ではないとはいえ驚きを禁じえない。どうみても幼女である。

「は、母か……世界は広いな」

「あゝ！ 私の事、子供だと思ってたね」

「そんな事より！ 私は認めませんよ。こんな男が……」

「ねえ、昶ちゃん。私が、認めたんだよ。分かる、よね？」

一見すると童女のような笑みだが、そこには抗いがたい何かが交じっている。流石に大司農まで上り詰めたのは伊達じゃないなと得心する王基を余所に王昶は怯えている。

「は、はい……分かり、ました」

「うん、じゃあ、今日は宴だよ。昶ちゃんはお友達を連れてきてね」

男の子は女の子が多いほうがいいんだから、四人は連れてこないとお仕置きねと王昶を追い出す。

王昶が部屋を出た途端にがらりと雰囲気が変わり厳粛な空間へと変貌し、王凌は静かに問う。

「伯與殿はこの国の状況を理解してる？」

「しつかりとは言えないが大体は」

「そつか。まあ、一応教えておくね。今は宦官たち濁流派と何虎奔中郎將たち清流派で水面下の戦いを繰り広げてるのさ。だけど宦官の方が主上（皇帝）に近いからね。張讓、趙忠の二人を父と母と言ってる位だ。今や彼らと目が合っただけで死刑に処される」

「民の声に応え、王巨君にでもなるつもりか？」

「まさか、私が儒教狂いの真似をする訳がないよ。身の程は弁えてる。だけど民は動く。赤眉と緑林の再来だ。君はどうするの？」

「分からん」

「そつか、そつか。うんうん、私も力を貸すよ。本当に微力だけどね」

「だから分からんと……いや感謝する。うむ、今日の酒はきつと旨いな。なんせ真剣に国を想う士と飲むのだから」

何の気なく洩らした言葉は、正に殺し文句だ。真の忠臣たる者を殺すのにこれ以上の言葉は無い。それは王凌の燻った心にひどく心地よい。最近皆、上辺だけの言葉を述べる。作り笑いで心にも無い世辞をたれる有象無象より好感が持てる。なにより媚びない。

「それと頼みがある」

「なあに？」

「名医を捜している。洛陽にいるんだろう?」

「あゝ 華陀の事だね。確か五日前に洛陽を出たよ。ちょっと待ってね。劉曄」

「はい」

王凌が呼ぶと天井より降りてくる少女。白雪の様に白い長い髪を翻した少女は王凌の前で拱手する。

「なにか?」

「あのねー彼に仕えて欲しいの」

「待て、俺は別に」

「伯與殿は北に行った華陀の足跡を追えるの?」

王基は唸るしかない。洛陽の北は広い。并州、冀州、幽州と闇雲に捜すには広すぎる。

「この劉曄は若いけど間諜の才は群を抜くよ 頭も良いし出自だって汝南の名門、劉家だよ。更に美人! これはもう泣いて乞うしかないよ」

「…… 何で劉家の御息女が間諜なんかしてるんだ?」

「ははのゆいごんにしたが、かんしんをちゅうした」

「奸臣を討つ為に間諜の技を鍛えて遂には暗殺しちゃったんだもんね。それを律儀に父親に伝えたら放逐されて、洛陽に来たところを私が拾ったのさ」

からからと笑う王凌と無表情の劉曄を目視して王基は溜め息を吐く。

「草か……確かに情報は必要だしな。よし、雇う」

「うん、うん、可愛がってあげてね」

「……ぽっ」

わざわざ口で言いながら頬を染める劉曄とニヤニヤ見ている王凌を見て王基は更に深く溜め息を吐いた。

その晩の宴会。王基は男一人、花園にいた。右手に座すのは洛陽北部都尉の曹操とその従姉妹の夏侯惇と夏侯淵。左手に座すのは曹一族の曹仁と曹純。全員の自己紹介が終わり酒宴は和やかに進む。しかし客人全員が美しい。曹仁はなんとも野性的な魅力に溢れているし曹純は儂げで可憐だ。

だが王基はただ一人の少女に見蕩れていた。

金色の花。美しく芳しい黄金の薔薇だ。きつと触ろうとした男は皆、棘に傷つけられただろう。それでも近づきたくなる魔性の一輪花。傷だらけになっても掴んでみたい。故につい声を掛けてしまう。

「曹操殿、酌をしてもらいたい」

和やかな宴席が一変し、深と静まる。王基へと夏侯姉妹も曹仁も曹純も明らかな敵意を向ける。彼女たちは王家の総領といえど無位無官の輩が敬愛する主を酌婦に貶めようとしているのを看過できない。しかし曹操は悪戯っぽく笑う。

「ふふつ、私を酌婦にしたいのなら相応の芸を見せなさいな。私が喜んで貴方の横に侍べるような、ね」

「ふ、む。なるほど、道理だな。ならば一つ舞わせてもらおう」

鼓持ちもいないが懷から扇を取り出し場の中央に立つ。

演目は幸若舞、大職冠。かぶきの要素を取り入れ適当に独自の大職冠に換える。

調子を取って謡い、合わせて舞う。動きの一つ一つに意味を持たせ緩急つけたこの舞は観る者によって評価ががらりと変わる。相応の教養がなければ楽しめない。

この国の物と全く違う舞いと歌は曹操の琴線に触れた。

「へえ、竜と人の玉の奪い合いね。舞いも独創的だし……良いわ。今晚は貴方の酌婦になりましょう」

「そんな!! お止めください!」

「黙りなさい! 私は約を違えないわ」

一喝で夏侯姉妹を黙らせて淑やかに王基の横に侍べり杯に酒を注ぐ。

「正面から口説かれたのは、初めてよ。大抵の男は逃げ腰なんだから」

「全く以って愚かだ。逃げ腰で近づくより堂々と構えて近づかせればよいのにな」

お互いにニンマリと悪戯っぽく笑う。それはまるで心裡を理解しあった者の笑みだ。

夏侯姉妹も曹仁、曹純姉妹も驚きに目を見張った。曹操は洛陽北部尉になってから取締りを厳しくし宦官だろうが高官だろうが法を破った者を罰してきた。今や洛陽では曹操は目の敵にされ寸分の隙も見せられない状況である。普段は、取ってつけたような笑みか無表情でいるのに、初対面の男に素顔を見せた。

これには、夏侯惇以外が興味を持った。だが夏侯惇には主がまるで寵姫の様に扱われているのが気に入らない。

気に入らないなら　　斬る。

手元に置いておいた幅広の刀、七星餓狼を掴む。

「華林様から離れる!!」

裂帛の気合いと共に大上段に構えて駆け振り落とす

「止めなさい!!　　春蘭!」

間一髪、頭蓋すれすれで止まった。

それを王基は気にも留めず曹操に杯をだす。殺されかけたというのに微動だにしない男に曹操は酒を注ぐ。この一件が宦官に伝われば有ること無いことをでっち上げられ死罪を賜るかもしれない。

緊迫が場を包む。夏侯惇もようやくマズイ事をしたと気付き、青くなる。

「うむ、うむ。俺も夏侯惇殿の気持ち分からなくもない。だが、殺し合いは不粋だ。宴会の勝負といったら、これだろう」

杯を掲げて不敵に笑う王基は更に王凌に目配せし酒を有るだけ出させる。

「夏侯惇殿が勝ったら、曹操殿は離そう。俺が勝ったら夏侯惇殿も此処だ」

げらげらと笑いながら曹操が侍べる方とは逆の場所を叩く。

「う、受けて立つ！」

そこからはやんややんやの大騒ぎ。夏侯惇だけでなく夏侯淵、曹仁、曹純、王昶を酔い潰し曹操に酔い潰されて王基は眠ってしまった。曹操の膝を枕に、布団代わりに夏侯姉妹と曹姉妹を掛けて眠る王基を曹操は見つめる。

「変な男ね」

「うん、うん。そうだよー 変だよー いつの間にか心に入り込んで。男嫌いの曹操殿にまでしっかりと。稀代の人たらしだね」

王基達が飲み干した大量の酒瓶の片付けを侍女に命じた王凌が戻ってきた。

「この男も中央に仕官するのですか？」

「あはは、しない、しない。させてもね。きつと直ぐに辞めちゃうよ。それで熨斗付けて国に喧嘩を売るね、多分。いや、確実に」

間違いないね、と笑う王凌に曹操も笑う。

ほんの数刻の付き合いでも分かる。この男はバカなのだ。だが、気持ちのいい男だ。この澱んだ都には似合わない程に清々しい。

洛陽に来てから荒んだ心に優しい風が吹く。曹操は微笑みながら太ももの上の頭を撫でた。

翌朝、スヤスヤと女体に埋もれていた王基は王凌に叩き起こされた。

「ほら、起きて、起きて。朝だよ、旅立ちの朝だよ！」

「……ああ、おはよう。これは男冥利に尽きるな」

「くふふ、みんな凄い美人さんだもんねー ほんと、ダメ男のくせに度量が広いよね」

「ダメ男とは心外な言い種よ。俺は自分に正直なだけだ」

「……まあ、いいけど。早く準備しなよ。劉曄が調べてきたみたいだから」

極上の肉布団から抜け出し、表の井戸で水を浴びる。酒気を飛ばし劉曄の部屋へ入る。

部屋には洛陽周辺の地図を持った劉曄がいた。

「じゅじん、かだはどうやら、ゆうしゅうの、ぎょようへむかったようで」

「幽州の漁陽？ 随分と北ではないか。なんでまた？」

「くすりのざいりょうが、こないんだって。やどのしゅじんのじょうほう。だからたぶんあってる」

「失礼するわ」

開け放たれた扉から曹操が堂々と現れる。昨日の酒量はかなりのものだったが影響はまったく出ていない。

「どうしたんだ？ 曹操殿」

「謝罪と御礼よ。私の従姉妹の無礼を詫びるわ。そして貴方の寛大な対応に感謝を。御礼に私が出来る事ならなんでもしましょう。純潔を捧げてもいいわ」

「それも、悪くないが……次に会ったらまた膝枕をしてくれればよい」

「そんなのでいいの？」

些か拍子抜けした曹操は疑問に思う。この男は相当な女好きである

から自分を喜んで抱くだろうと覚悟を決めて来たのだ。

「いや、曹操殿を己がものにしたいと思っている。だが、曹操殿が俺のものになりたいと思っていない。だから、抱かぬ」

「ふふっ……貴方は本当に変な男ね！」

堪えきれず曹操は腹を抱えて笑う。この女好きは身体だけではなく心も欲しいらしい。なんと厚かましい男だろう。この男のモノになるつもりはないが。だが、この男が欲しい。その想いがぼろりと口から洩れる。

「もし、私がどこかの太守ならば貴方を絶対私のものにしたのに」

「俺は貴女のものにはならない。貴女を俺のものにするのだ」

お互いが心に誓う。

目の前の者を必ず手に入れると。信念をぶつけあい、武を競い、智で縛る。そしてねじ伏せ目の前の者を貪るのだ。火花が散りそうな程ギラギラとした視線を交わす。

「そろそろ、いいですか」

「ええ、それでは失礼するわ。王基殿、私は曹操、字は孟徳、真名は華林。貴方を手に入れる者よ」

不敵に宣言する華林は威風堂々と部屋から出る

「俺は王基、字は伯與、真名は幸村。貴女を手に入れる者だ」

華林が出ていき静かになる部屋で劉曄は無表情で王基に呟く。

「おとこぎらいで、ゆうめいのそうもうとくが、ごしゅうしんだ。
きょうはやりがふってくるかも」

「それは周りにろくな男がいなかったからだろうよ。彼女と正面から対峙できないのでは興味も持たれまい」

ニヤニヤしながら旅の行程を煮詰める。ただ彼は失念していた。この世界の女性は日ノ本の女性とは違い武家の女としての教育など受けていない。独占欲、嫉妬を抑える術を知らない。否、抑えやしない。女の情念の恐ろしさを彼はまだ知らない。

旅支度を整え劉曄を連れて旅路につく。王凌と王昶が見送りに来たが王昶は洪々来た様だ。

「見送りなど別にいらんが」

「王家の総領を見送らない訳にはいかないよ。次に会う時を楽しみにしてるよ、伯與殿。」

「うむ、命を大事にな。生きていなくば叶うまい」

二人はまず北へ向かう。数日かけて小平津関へ行き黄河を渡る。河内郡に入り、温県の山道を歩く二人の前にボロボロの人が倒れている。浅い切傷が多数に足を捻ったのだろうか、赤く腫れている。黒く長い髪も顔も服も泥にまみれて薄汚れている。横には立派な大

刀がある。

「女子か……どう思う、劉曄？」

「ぜったいにめんどごとだよ。かわりたくないな」

「そうか。面倒事が……よし連れて行こう」

「ごしゅじん、なんで？」

「面白そうだからだ」

それ以外に何かあるか、と首をかしげる王基を劉曄は無性に叩きたくなったが我慢する。一応こんなのも主なのだ。王凌に受けた分の恩くらいは耐えてみせると意気込み主（仮）の話を聞く。

「見る、きつとあそこに俺がある。そこまで行けばこの娘の手当てもできよう」

指差す方には確かに飯炊きの煙が立ち上っていた。だが、嬉々行き倒れの女を抱き上げた王基を見るとただ女好きが興じたのではないかと思う。劉曄はこれからの旅路に漠然と不安を覚えた。

目的の庵は山の裾に隠れるようにひっそりと佇んでいる。随分と立派な庵が山奥にひっそりと建っている理由など一つしかない。隠居、世捨て人だろう。

人を拒む門をぶしつけに叩く音が鳴り渡る。

「誰かいなか！　怪我人があるのだ。開けてくれないか！」

数拍の間を置きギギイとゆっくりと門が開く。そこには壮年の男がしかめ面で立っていた。

「……怪我人を見せよ」

「こ奴よ」

王基が女を見せると男は何も言わず家の中に入っていく。王基と劉曄も後に続くがどうも堅苦しい家である。息が詰まりそうだとぼやく王基は勝手に客間に入る。

「……仲達！」

「なんでしょうか？　お父様」

黒い。奥から出てきた女を見た王基の感想はその一言に尽きた。真つ黒な髪は背中を覆い、服も黒い和服を着ている。肌は病的に白い。それが更に黒を際立たせている。だが、黒の印象が一番強いのはその瞳。底の見えない闇の様な呑み込まれそうな漆黒の瞳。

「怪我人だ。診てやれ」

「はい」

「劉曄、頼む」

「うん」

怪我人を連れて部屋を出ていく。部屋には壮年の男と王基だけとなった。男は佩いている刀を見やる。

「お主は王允殿の親族か？」

「うむ、孫だ。王伯與と申す」

「ワシは司馬防。あの御人は息災か？」

「今のところは」

「そうか……今日は泊まってい方がいい」

「かたじけない」

手当てをして客間に劉曄達が戻ってくるが部屋に入れなかった。片や静かに茶を飲む男達の雰囲気、片やうつすらと微笑む父に吃驚し動けない。

結局、部屋には入らず二人は夕餉の支度に向かった。

宵闇がしつとりと庵を包む。月の無い夜は灯りがないと何も見えない。時々、闇に恐れを懐く者がいるが王基は闇が嫌いじゃない。ゆらゆらと何も見えない庭園を歩く。見えない故の美しさに酔いしれる。目を閉じて、大地の声を聴き、風と語らう。どれだけの時間そうしていただろうか。そろそろ戻ろうと踵を反す。

「お待ち下さいませ」

後ろから腕を掴まれる。しかし五感がまったく捉えなかった。腕に触られなければ気付かずに立ち去っていたと言える程、自然に隣に立っていたのだらう。耳元で妖艶に囁く声は夕餉の時に挨拶した司馬懿の声だ。だが、振り返れない。闇よりなお深い黒に吞まれそう
で。

「……何か用か？」

「ええ、私は貴方に興味が湧きました。いえ、一目惚れかもしれませんが。知ってますか？ 父は笑った事がない、と言われる程厳格な人です。なのに貴方の前で笑った。笑ったのです。ああ！ 貴方を私のものにしてやりたい。両手、両足を断ち私の寝台に繋ぎたい」

言葉にどんどん熱が籠る。熱を孕んだ闇が王基を取り巻き、更に狂気を溢れさせ司馬懿は尚も囁く。

「でも、まだしません。もっともつとこの感情を熟成させて、貴方がもっと強大に光り輝く時こそ私は貴方を絶望に堕とします」

熱に耐えきれず司馬懿は王基に身体を擦り付け自慰に浸る。

「んっ……はあ、永久の闇で、ああっ……溶け合いましょう？」

司馬懿は一際高くうめくと王基の腰をしとどに濡らした。劣情が湧き上がるが本能が訴える。この女はマズイと警鐘を鳴らす。どうにか力の抜けた腕を振り払い王基は部屋に逃げ帰る。後ろから聴こえる女の忍び笑いに徐々に恐怖という感情を想い起こした。

翌朝、王基は未だに眠り続けている女を背負い早々に庵を出た。劉曄に大刀を持たせギョウを目指す。

司馬懿という女が恐ろしい。自分とは真逆な人間。全てを包み溶かす闇。だが、佳い女だ。傾国の美女と言えいいのか、毒の入り混じる色気は堪らなかった。抱きたかったなあと悔みながら歩く。背中に背負う女の柔らかさと暖かさが王基には救いだった。

静かになった庵にはご機嫌な女の忍び笑いが響いていた。

「随分と上機嫌だな、仲達」

「はい、つまらない浮世と思っていましたが、欲しいものが見つかりました」

「王家の小僧か？」

「はい、ああ　早く熟してほしいのです。彼が最も光輝く時に私は彼を奪い、隠し、犯す。どんな表情をしてくれるのか……ああ！」

身悶える司馬懿を司馬防は面白そうに見る。

「しかし王家か……因縁よな」

「……はあ、はあ、何か、当家と、問題があるのですか？」

「若い頃にな、お主と同じように王家の女に懸想した。あらゆる手段で手に入れようとしたが……他の男と駆け落ちしおった」

司馬防の瞳に司馬懿と同じものが宿る。

「だからな。まずは宦官を使い、女の母を無実の罪に陥れた。そして女の居所を見つけ周囲の賊に誤情報を流した」

司馬懿と同じ、いやそれ以上の狂気。司馬家の血に眠る狂気が再び目覚める。奇しくも女の息子によって。

「だが、あの男は一筋縄ではいかないだろう。見たか？　去り際の眼を。お前を包み込んでやると語っていたぞ」

「はい！　楽しみです。私が彼に照らされるか、私が彼を引きずりこむか」

司馬の庵は魔物が潜む。

山奥、故に人はあまり訪ねてこない。浮世から離れるようにひっそりと暮らしていた。

だが一人の男が司馬の血に火を着けた。

今は司馬懿一人にしか火が着いてないがいずれ姉妹にも伝わるだろう。姉妹は仲達含めて八人いる事を王基は知らない。

夕暮れになるとギョウも近くなってくる。あと少しといつとところで背負っていた女が身動く。

「う……に、兄様？」

「すまぬが、妹を持った覚えはないな」

朗らかに笑う王基を見て人違いに女は赤面しうつ向く。

「す、すみません。兄に似ていたもので、ここは……それに貴方たちは何？」

「俺は王伯與、こっちは」

「りゅう、しょう」

「そして、ここは冀州魏郡ギョウだ。河内郡で行き倒れていた貴女をここまで連れてきてしまった。すまん」

「いえ、行き倒れの私を介抱してくださったのです。ありがとうございます。私は……長生と呼びます。」

ぼんやりしていた頭が覚醒していくにつれて自分がどんな状況かが理解できる。

背負われている。密着してる。

朱が引きかけた顔を再び真っ赤に染める。

「お、降ろしてください。自分で歩けますから……」

「駄目だ。いいか、長生。お前は足を捻っている。そしてなにより

「お前は柔らかくて心地いい。だから降ろさん」

羞恥で耳まで真っ赤にした長生は再度うつ向きボソリと呟く。

「先程の兄様に似てるというのは取り消します。兄様はもつと誠実な人でした」

「誠実などつまらん。少しくらい我が侘な方が良いのだ」

「あ、貴方は！　良いですか！　人は慎ましかにを美德と
」

「だから慎ましかにお前の柔らかさを堪能しておるのだ。さては、お前、未通女　」

「わあ！　わあ！　な、何を言っている！　大体、経験して
ようがしてまいが関係ないだろう！」

「馬鹿を申せ。人生の半分は損をしている。よし、俺が教えてやる
」

「ば、馬鹿を言うな！　い、いいか。私はな、そういうのは好き
合った者同士が　」

ギョウに着くまでこの口喧嘩は続いた。すっかり口調が崩れた長生
とからかうような王基は最初よりグツと距離が近づいていた。

まるで馬鹿な番いの痴話喧嘩のようなやりとりを聴かされている劉
曄は少し頬を上げて小さな声で呟く。

「あれはだめなおとこにほれるおんなだな」

まったくあの男の女たらしっぷりは酷い。誰でも良いように見えるのにすっかり相手を選ぶ。そして相手の深くまで入り込み、魅了する。きつと彼女は彼のおめがねにかなったのだろう。

曹操、司馬懿。この二人は確実にご主人を狙っている。曹操は仕方ない。ご主人の自業自得だ。

けれど、司馬懿はまずい。曹操より底が見えない上に狂ってる。手当てや調理を共にしたただけで感じた。全ての動きが読まれているかの様な、まるで彼女の掌の上で動いていると。

良い女というのは命を懸けるに値するのかわからないけど、とりあえず慎んでほしい。

劉曄の気持ちとは裏腹に赤々と地を照らす太陽がどこか憎らしかった。

ギョウの城下の宿に二人はいた。劉曄は情報を集めに行き、王基と長生は服を買いに行っていた。

長生の服がボロボロの為、服を買ってやると王基が長生を連れまわす。

「これなんかどうだ？」

「伯與、買ってくれるのはありがたいが……どうして、どうして破廉恥な服しか選ばないんだ！」

「破廉恥？ 何がだ？」

「お前が選ぶのは全て露出が激しい！ 先のヤツなどほぼ下着ではないか」

衣料店の商品を飾っている通路で烈しく言い争っている二人に、店主は商人特有の笑みを浮かべて近寄る。

「お客様、こちらの服はいかがですか？ 盧子幹先生の御弟子が作った逸品ですよ」

「おお、見事だな。よし、これにしよう」

「……待て、伯與。私は、もっと安い物で良い」

「嫌だ。店主、いくらだ？」

「そうですねえ、一品物ですからな。このくらいでいかがで？」

「高い、だが買った！」

驚きを胸に秘め店主は銭を受け取り数える。確かにある。馬の頭は買える値だ。

「お客様、こちらの革靴などいかがですか？ 勿論、御代はいりません」

「ならば貰おうか」

「伯與！ 私は……」

長生の口を塞ぎ商品を受け取り店を出る。何か言いたそうな長生を宥めすかして連れていく。そして宿をとり部屋で王基は着替えた長生の格好を眺めている。

緑を基調に脇と肩の部分はパツクリ空いて肌を晒し二の腕から手首まで衣服が覆っている。そして下半身は短い筒状の衣服、すかーとを履いており足袋のような布が太ももまで覆っている。

「あ、余り視るな……恥ずかしいだろう」

消え入りそうな声の長生を王基はニヤニヤと見つめる。
このすかーと、とやらは良い。麗しき足が直に見れる。

結局、劉曄が戻ってくるまで王基は悦に浸りっぱなしだった。

戻ってきた劉曄に殴られ正氣に戻った王基はようやく本題を切り出す。

「長生、お前はどこにいくつもりなんだ？」

「私は……幽州の方へ」

「ならば、俺達と一緒にだな。旅は道連れだ。共に参ろう」

「あ……でも、私は」

「久しぶりの寝台だ。俺はもう寝る」

なんとか断ろうとする長生を余所に王基は眠りに就く。
なんて最低な男だ、と長生は思う。介抱してくれたり服を買ってくれたのには感謝しているが、軽薄で、いやらしくて、私はこんな男大嫌いだ。

翌朝、やけに外が騒がしい。劉曄に調べさせたところ、河内郡から来た衛兵が門で人相改めをしているらしい。捜しているのは黒髪の大刀を持った女。心当たりはある。

「長生……」

「すまない……これ以上迷惑をかけたくない」

大刀を持ち部屋を出て行こうとする長生を王基は止める。

「待て、わざわざ捕まりに行つてどうする」

「じゅじん、これいじょうはふみこまないほうがいい」

「劉曄、それは駄目だ。救った窮鳥を放り出すなど人のする事ではない！」

王基の一喝に劉曄は黙り込む。

「いや、すまぬ。だが俺は長生を幽州に連れていく。これは決めた」

「聞かないのか？　私が何をしたのか」

「言いたくなつたらで良い。まずはギョウを出るか」

「しかし、どうやって？」

「なにか策はないか？　劉曄」

「ないよ……つてもないし、かくれてでるにはこの、しろはけんろうだ」

「うむ、ならば門を通るしかないか」

ニヤリと笑う王基は早速準備に取り掛かった。

ギョウ城は七つの城門がある。その内の一つ北の玄武門も混雑している。一人一人止めて顔を見ているからだ。門を通ろうと列を成す人々の横を男が通る。背中には外套と頭巾を被った女をおぶっている。城門を通ろうとする男を兵士は呼び止めた。

「何をしている！ 列に並び審査を受ける！」

「申し訳ござらぬ。実は妻が奇病にかかりまして……医者にも匙を投げられる程でございます」

「ほう、どのような病なのだ？」

「急に皮膚が焼け爛れます。妻は顔が……そして今日、みどもにも症状がでてまいりました」

男が腕を捲ると確かに焼け爛れていた。それは視るに耐えない程に。

「どこか人の来ない山奥で夫婦二人寄り添い死のうと決めたのです」

兵士は顔をしかめ距離をとり追い払う様に手を振った。

「ならば、早く行け！」

「ありがとうございます」

男は城門を通りギョウを出る。勿論、この男は王基だ。彼の策は単純至極。自分の腕に熱した鉄板を当てて火傷をつくり病を装い巧く抜けたのだ。劉曄は先に大刀を持たせて北の邯鄲で合流する手筈を整えた。

「何故……ここまでしてくれるんだ？」

「お前が佳い女だからだ。男が命を懸けるのには充分だろう」

呵々大笑する王基を長生は視れなかった。

風景が滲む。

なんて、男だ。行き倒れの女の為に腕を自ら焼くなんて。軽薄でいやらしくて、だけど、私はこの男が

背中の泣きじゃくる声を聞こえないふりをして先を急ぐ。

姓は王、名は基。字は伯與、真名は幸村。女と酒と博打に命を懸ける駄目男。

戦乱の世を駆け抜けるのは今少し後の事。

おまけ〜曹操〜

洛陽北部都尉の仕事は治安維持である。正直な所、出世からは程遠い仕事だ。曹操は元は郎という身分で出仕した。

これは皇帝周辺の警護を兼ねた、秘書的な世話係だ。そこで曹操は王昶に出会った。二人とも反骨の気概が激しく出会って数刻で殴り合いの喧嘩をしたが、なぜかすぐに友宜を交わし親しくなるのも早かった。

或る日の花見の席で存外に短気な曹操は宦官が幅を利かすのに耐えられず蹇碩を論破し恥をかかせた事により報復人事をくらってしまった。

それが洛陽北部都尉だ。他の郎の者は嘲笑っていたが王昶だけは態度を変えずに接していた。これに曹操は無二の友を得たと喜んだ。そんな時に王昶に宴へ誘われた。

「頼む！ 一族の方と従者の方も一緒に」

「どうしたのよ？ いつも貴女ならたかが宴にそんなに必死にならないじゃない」

「そ、それが母様にな。四人は連れてこないとお仕置きだと」

「お仕置き？ 何かあったのかしら？」

「その、王允様の孫が来てね。母様が王家の総領に認めたんだ」

「ふ〜ん、美女なの？」

「いいえ、男よ。むさくてごついわ」

正直、欠片も行きたくないがあまりにも王昶が頼むので致し方なく、曹操は夏侯姉妹と曹姉妹を連れて宴会に臨む。

案の定、男は精悍ではあるが曹操の食指はまったく動かなかった。適当に挨拶を交わして席に座る。宴会が始まると曹操はどこからか視線を感じる。少し探ってみると直ぐに分かった。男がジツと視ているのだ。男が女を見る目で。曹操は歯牙にもかけず受け流していたが男は更に踏み込んでくる。

「曹操殿、酌をしてもらいたい」

大抵の男は擦り寄るように酌をして愛を囁くがこの男は近づいてほしいらしい。

室内に満ちた敵意も気にも懸けず曹操を見つめる男。

面白い、と曹操は悪戯っぽく笑う。

「ふふつ、私を酌婦にしたいのなら相應の芸を見せなさいな。私が喜んで貴方の横に侍べるような、ね」

流石にこればかりは怒るだろうと思いつつも曹操は止まらない。いや、止めない。この程度で気分を害するような男が曹孟徳を手に入れられようか。曹操は男がどう反応するかを見つめる。

「なるほど、道理だな。ならば一つ舞わせてもらおう」

不思議な舞だった。武骨だが雅な動作。低く心地よい唄。舞いにも精通している曹操でさえ初めて観た傾国の舞い。

そして曹操は男の横に侍べる。この男に俄然と興味が湧いてきた。だが、誤算があった。夏侯惇が男を叩き斬ろうとしたのだ。間一髪、頭蓋手前で止まったが剣を向けた無礼はなくならない。殺されかけたのだというのにこの男、悠然と杯を出してくる。酒を注ぎながら

曹操は男に怒気が無いことに気付いた。

拳句、笑い事の様に流して呑み比べを始める始末。気の荒い曹仁や内気な曹純でさえ楽しそうに酒を呑む。夏侯淵でさえ微笑んでいる。全員を酔い潰し曹操に酔い潰された男は眠ってしまった。その寝顔を見て曹操は思う。

まるで太陽の様な男ね、と。

クスクスと、微笑む。

太陽を手に入れるのも悪くないかしらね。

ひっそりと発した言葉は誰にも聞かれる事なく虚空に溶けていった。

伏魔殿（後書き）

あの花を観て泣いた駄作者バズです。

遠い、遠い記憶の彼方。蝉の鳴き声に茹だるような日差しの中、山を駆け、川に行き、秘密基地を作って遊んだ懐かしい日々が甦りました。

今も夏が来ると白昼夢のように昔を思い出しそこはかとないうらさみ感と湧き上がる切なさを抱きしめています。

やはり、子供の時の方が物事は響きますしね。子供の時の失敗はずつと尾を引きますから。犬に咬まれた然り、溺れた然り。斯く言う作者も子供の時に読んだ落ちていたエロ本で性癖は決まりましたね。幸運にも黒髪ロングのお姉さんの本だから良かったものの、もし児ポだったら作者はLOの愛読者になっていたかもしれないですね。

つまり何が言いたいかと言うと、児ポは道端に捨てずに焼却処分ががっちり紐で縛って規則に沿って処分してください。

何故こんな事を言うのかって？ あの花観て昔の友達に会ったら真正ロリ、ペド一歩手前になってました。目覚めた原因は落ちていた児ポらしいです。

思い出が砕け散る音がしました。

桃始華

幽州の北の僻地、漁陽。光武帝の政策により漢人と烏丸の民が入り混じり暮らしている。だが漢人による差別は行われていた。草原を追い出された部族の民は苦汁を呑みひっそりと暮らしている。

野良犬の様な生活に甘んじてはいるが、誰もが心に気高き狼の心を宿して

漸く辿り着いた漁陽はあまり活気がない。僻地というのを差し引いても活気が無すぎる。

右腕に包帯を巻いた男と大刀を持った女が閑古鳥が鳴く通りを歩いていた。足の具合が良くなった長生と王基である。

「なんと申せばいいか。寂れた街だな」

「まあ、ここの太守はろくでもない奴の様だしな」

「ごしゅじん、いた、あそこ」

情報収集に行っていた筈の劉曄が急に現れて指を差す。

そこには男女四人が商人と言いつ争っていた。正確には三人だ。老人は一步退いたところで喧騒を見ている。

「あの爺さんが……とりあえず止めるか。手伝え、長生」

「心得た」

二人で商人と男女の間に入り声を張り上げる。

「あいや、待たれい！　少し落ち着け」

「なっなんなんですか！？　あなた達は？」

「うむ、王伯與と申す。こちらは長生と劉子揚。華陀殿に用があつて参つたが往来での騒ぎを放つてはおけん」

「わたしは劉玄德です。こっちは学友の公孫伯珪。私塾の先生が病にかかり薬を求めてこの街まで来たんですけど……」

劉玄德と名乗つた少女は大層な美人だった。長い髪を羽の髪留めでとめ何とも優しい瞳をしている。だが王基はそれらよりも豊満な胸を凝視していた。プルンと柔らかさそうなそれは王基を魅了してやまない。

「あ、あの〜」

「伯與！　失礼だぞ！」

長生の怒声を聞いても目が行つてしまふ。どうにも長生はそれが許せない。王基が女にデレデレしてるのを見るとなんだかとってもムカムカするのだ。堪らなく胸が痛いのだ。

どうすれば治まるのか分からなくて王基にきつく当たつてしまふ。本当は

「わ、分かつてるぞ、長生。そちらの御仁は？」

「俺は華児。華陀を継ぐものだ！　あちらに居られるが医聖と呼ばれた我が師、華陀だ！」

「うむ……？」

妙に暑苦しい男の、妙にむさ苦しい自己紹介を受けて王基は頷く。そして華陀と呼ばれた老人の方を見る。

「おい、華児。華陀殿が動かないのだが……」

「ああ。眠っていらっしやる。気にするな、いつもの事だ」

「……そうか、往来での話もなんだ。とりあえず宿に行かないか？」

玄德と阿華に了承を得て宿へ歩きだす。残されたのは影の薄い女と影の様に忍んでいた女だけだ。

「私……忘れられてる！？」

「すごい……まったくそんざいに気づかなかった。ねえ、かんちょうにならない？」

「私は……私だって存在感出したいんだよ！　格好良く、私は公孫伯珪……白馬將軍、公孫賛だ！　とか言ってみたいんだ！」

声は虚しく、一陣の風に掻き消された。

宿の一室を取り、話し合う為に各々が椅子に座る。劉曄は更なる情報収集の為に消える様に街へ消えて行った。

「先ずは俺の話から聴いて貰おう。母が重病でな。おそらく肺の病だと思ふのだが……名医と名高い華陀殿に診てほしい」

出来る限りの礼はする、と頭を下げる王基をジッと視ていた華陀は重たげに口を開く。

「診てやりたいのは山々じゃがな……ワシは此処で薬の原料を待たねばならん。手持ちの薬も切れてしまったしのう。どうにも賊が蔓延っていて烏丸との交易を遮っているから何時来るかわからんのだや」

「あ！ 私たちもそうです！ 私塾の盧先生が倒れてしまつて熱も下がらずに苦しんでいるんです。それで烏丸の薬は良く効くつて聴いて来たんですけど……」

王基は項垂れた玄德を視ながら考えを巡らせる。だが、まだ情報が足りない。

「ですが師匠。我等がゴッドヴェイドーは針を使えば……」

「馬鹿者！！ 針は確かに便利じゃ。じゃが救える者は少ない。だからこそ薬を処方して大勢の者を救う。これが五斗米道よ！」

「はっ、はい！ すいません師匠！ 俺が間違つてました！」

暑苦しいやりとりの最中に劉曄が現れ、音も影もなく王基の後ろに立つ。

「ごしゅじん、おみみはいしゃく」

「うむ、うむ」

劉曄の話に耳を傾ける。

仕入れてきた情報に因ると賊は五百から七百で漁陽の北東、赤峰に陣取っている。この太守は臆病で兵を出さない上に烏丸の民を差別しており先日、草原での戦いに破れて漁陽へ身を寄せた沙陀族から馬を騙し盗った挙句に城外に追い出したとの事。そして廊下にこの部屋を窺っている者がいる。それもかなり腕が立つ。

それだけ言うと劉曄は霞みの如く消え去る。一頻り頷いていた王基は廊下を睨んだ。

「外の者、入って参れ！」

急な言葉に全員が扉の方を向く。ゆっくりと開いた扉から女が入ってきた。凜とした雰囲気、茶髪で短髪の女。何故か男装をしているが体つきで女だと分かる。腰には龍の頭が付いた金属に包まれた縄を幾重にも巻いている。

「失礼、美しい花に釣られてきた。某は張儁乂と言う。その美しく猛き花と手合わせしたい」

「……私か？」

視線は長生にのみ注がれている、が王基が間に入る。

「待て、その立ち合いは認めん」

「何故、貴殿が決めるのだ。私は……」

「こ奴（の命）は俺のものだ。だから認めん」

「なっ！ 伯與……それでは誤解が」

「なるほど、貴殿の奥方だったか。だが試合たいのだ。頼む」

「ならば条件がある」

真っ赤になる長生の口を塞ぎ王基は続ける。

「赤峰の賊の事は知っているか？」

「ああ、千人程の集まりだろう。官軍が腰抜けなのを良いことに好き放題していると」

「うむ、それを討つ。故にだ。手を借りたい」

雫叉は胡散臭げに部屋を見周す。老人を入れて六人。幾ら黒髪の女が強かるうとこの人数で何が出来ようか。

「兵も無しにか？」

「いや、兵は集める」

「義勇兵か……だが、集まるのか？」

民が命を懸けてついてくる為には名声が必要だ。だが、この中に有名な者はいない。これでは人も集まらないだろう。

「あ、あの！　ほ、本当に戦うんですか！？　何とか話し合い出来ないでしょうか？」

「何を話し合えば良い？　襲わないで欲しい、解散しろ等と言っても聴くわけないだろう」

王基の言葉に反論出来ずに玄德は黙りこむ。それに淡々と語りかける。

「その優しさは美德だが悪徳でもある。優しいとは甘い事ではない」

「それよりも先程の問いに答えて欲しい」

焦れた雋乂が割り入ってくる。王基はニヤリと笑い宣う。

「助力してくれるなら話そう」

「……分かった。協力しよう」

「よし、よし。兵は草原の民に協力してもらおう」

「沙陀族を？　無理だ。奴等は漢人を嫌っている。いや、憎んでいるかもしれない」

「そうだ。私は遼西郡の豪族の出だが、やはり五胡の者とはどこか隔たりがあったぞ」

そこで王基は初めて伯珪の事を見た。

「そうか、伯珪は豪族の出か……うむ、これならば上手くいく」

王基は机に向かい荷物から竹簡を取り出し墨を入れた竹簡と筆を使い文をしたためる。

「劉曄！　これを持って中山の張世平殿の元へ行け」

「りょうかい」

天井より現れた劉曄は手紙を受け取るとまた天井に消えた。

そして王基は己が策を話す。それを聞いた全員が胡散臭そうな目で王基を見る。

「貴殿はまるで張儀か蘇秦の如くだな」

「只の子供騙しよ。だが小心者には効くだろうがな」

劉曄ならば三日程度で帰ってくるだろう。それからが策の始まりだ。

深夜に王基と長生は向かい合っていた。他の面々は各々が部屋を取り自分の部屋へ帰って行った。この部屋に居るのは二人のみだ。

「それで、何だ話って？」

「……私の事だ。まず最初に謝っておく。すまない。私はお前を騙していた」

深々と頭を下げる彼女を止める。

「いや、別にいい。最初は興味本位だったかな。お前が予想以上に佳い女だったからな。つい助けてしまった」

にへらと笑う王基に彼女の秘める想いは更に募る。
もつとこの男に近づきたい。本当の自分を見てほしい。
出来るならば私の事を

「私の長生というのは偽名だ。本名は……関羽、字を雲長、真名を愛紗。河東郡解県で役人を斬り逃げていたのだ」

「理由が在ろう？ お前が好き好んで罪を犯すとは思えん」

「……私の家の近くには解池という塩を産出する地がある。兄様はそこで塩官をしていたのだ。兄様は清廉潔白で信頼厚い人だったが、兄様の上役が塩の横流しを行っていたのだ。その上役は責を兄様に押し付けて」

辛そうに頂垂れる愛紗。その様は儚げな月下美人もかくやと思えてしまい、王基はつい抱きしめてしまう。

「あつ……私は兄様の仇をとった。だが……何人もの命を奪った。きつと横流しの事など知らない兵も斬った。私は、私は正しかった

のか！？ 教えてくれ……教えて、伯與」

腕の中の彼女は華奢で、小さく震えている。それが王基には堪らなく愛しい。だが紡ぐ言葉は優しくはない。

「人を殺した者は皆、悪だ。だが正しくなければ殺せない者は只の臆病だ。お前はもっと楽に生きた方が良いぞ」

上目で見上げる愛紗に極自然に唇を重ねる。愛紗は突然の出来事に反応出来ずに成すがままになるが寝台に押し倒された時に正気を取り戻した。

「な、なにをする！！ 伯與！ 悪ふざけにも」

「幸村と呼べ……愛紗」

耳元で甘く真名を囁かれ愛紗の抵抗が止まる。その隙に王基はまさぐり愛撫し服を脱がしていく。

「ま、待て、待って。伯、ゆ、幸村。子が……やや子がきたらどうするつもりだ」

「責任はとる。お前は俺の女だ」

「うん」

玄徳は部屋で唸っていた。伯珪は既に眠ってしまった部屋で玄徳は王伯與という男の事を考える。彼の策はある意味では理想的だ。賊以外は皆、救われるかもしれない。沸き立つ心が訴える。彼と話したい、と。

夢とか理想とか語り合いたい。きっとそれは素晴らしい事だ。

そう思い立った玄徳は王基の部屋へ赴く。だが部屋の中から変な声がする。

玄徳はゆっくり扉を開ける。少し開けたところで中の様子が目に飛び込んでくる。

（わ、うわ　　す、凄い……）

玄徳が息を呑み見つめる先には獣の様に交わう王基と愛紗の姿があった。厳格な雰囲気だった彼女が嬌声をあげて身動きするのはとても淫媚で、それに覆い被さり律動する男。部屋から漂ってくる生臭い男女の匂いが身体の奥を刺激する。無意識に手が股間へ動くがギリギリで理性が勝り、手を止める。

しかし目を逸らせない。食い入る様に二人を熟視する。

男女の営みは知ってはいるがした事は無い。玄徳は結局、二人が果てて動かなくなるまで覗いていた。

（許せん、絶対に許せん。幸村の奴……私に妾になれ、などと）

男の腕に包まれて愛紗は怒っていた。

抱かれたのはいい。拒まなかった私も悪い。だが、だが！　　既に

妻がいるだと！

愛紗は気付いてないが胸を焦がすのは怒りの炎ではなく嫉妬の炎だ。幸せそうに寝ている男が恨めしい。

全てこ奴がいけないのだ。

男の寝顔を視てると悩むのも馬鹿らしくなってくる。愛紗一つ、溜め息を吐いて眠りに就いた。

翌、昼過ぎに起きてきた王基を玄德は散歩に誘う。顔を赤くしてモゴモゴと口ごもり、結局は無理矢理に王基の手を引いてきた。その際、愛紗の顔が般若の如く変化したのを幸か不幸か二人は直視せずに外へ出れた。

長閑な道を歩き二人は町外れにある桃園にまで来ていた。淡紅色の花の実が膨らみかけた桃園は美しくて王基は目を奪われた。

「えへへ、綺麗でしょう？　満開の花とは違った良さがあるんだよね……」

「ああ、綺麗だ。だが、残念だ。酒が欲しかったな」

「お酒はないですけど、御握りならありますよ」

「うむ、頂こう」

桃の木に寄り掛かり、桃の香りを楽しみながら御握りを食べる。普段ならば味気ない飯も、桃の香りや鮮やかさが飯を美味しくする。

「あの、あのね……伯與さんに聞きたいの。伯與さんは、夢とか理想とかありますか？」

「夢……か。美女を廻りに侍らしたいし業物の武器も欲しい。だがな、それよりも大事なたった一つだけ譲れない夢がある」

「……それは、何ですか？」

「自分らしく生きる事だ」

「うゝ　　良く判りませんよ」

「夢なんてそんなものよ」

無邪気に笑う王基につられて玄德も笑う。

「私も夢があるんです。いつか、憎しみもない、悲しみもない、互いに想い合う世にしたい。なんて思ってるんです」

真顔で言う玄德に王基は笑う。馬鹿にしている訳でもなく、ただ困った様な笑顔を浮かべる。

「なるほどなあ……」

「力も智慧もない私がこんな事を語るのはおこがましいかもしれない……けど！」

「玄德、人の一生はこの桃の樹みたいなものだ」

「な、何を……」

「美しい花が笑顔よ。周りに幸せを振り撒く福の結晶だ。だが、楽

しいだけの笑顔にはきつと誰も惹かれない。悲しみも憎しみも辛さも人生を彩る一片の花弁だ、と俺は思ってる」

それを超えるから笑顔は美しいのだ、と王基は笑う。確かにその笑顔は輝いていた。だが玄德は認めたくない。

「そんなの、そんなのあなたみたいな強い人だけです。普通の人は……」

「確かに人は脆い、だが強い。お前が思ってるよりもずっと、な」

「私の……夢は……」

玄德は混乱の極みに陥った。足元が崩れる様な不安が身を包む。

分からない。私の自己満足だったのだろうか。ただ、人を見下していただけなんだろうか。今までは、みんな私の夢を嘲笑うだけでこんな風に論破される事はなかったのに。

もはや、玄德は王基の言葉に反論出来ない。心が納得してしまった。何故なら玄德が人に優しく出来るのは辛い事や悲しい事、怒った事を乗り越えて来たからだ。母が亡くなった時に、家と土地を騙し盗られた時に、無実の罪を被せられた時に。母が生きていたら、家と土地を盗られなければ、冤罪を被らなければ、今の玄德はきつとない。

頭が沸騰しそうな程に考えて玄德は泣きそうになった。まるで迷子になった子供の様な顔をして王基を見る。

笑っていた。優しい慈父の笑みで見守っているが、泣き出しそうな彼女に話しかける。

「俺が言いたいのは守るのではなく支える方が良いのでないかと思っただけだ」

「支える……？」

「うむ、生きる場を整えてやれば良い。悲しみも憎しみも絶えないが明日が訪れる様にしてやれ。さすれば……」

天を仰ぎ、桃の樹に彩られた空を見る。玄德もつられて空を見る。

「いつか人は笑える。そう俺は思っている」

子供っぽさや雄々しさが消えてどこか達観した表情を見せる王基に玄德は見入ってしまう。だが直ぐにいつもの悪戯っ子の顔に戻る。

「よし、行くぞ、玄德。先ずは酒家だ」

来た時とは真逆に王基が玄德を引っ張っていく。

まだまだ未熟な白い桃の花に確固たる色が塗布されていく。紅い意思と白い優しさが入り混じり、石竹色に変わっていく。とても小さな、だが人を成長させるには充分な変化。

うん、もう少し、考えてみよう。

そう決めて玄德は王基の横に並ぶ。

答えはきっと

寂れた集落で大宴会が催されている。二百人近くの老若男女が笑い、歌い、踊る。中心に居るのは二組の男女。一組は王基と玄徳、もう一組は名前すら聞いていない。

何故、こんな事になったんだろう、と玄徳は酔った頭で思い出す。桃園から酒家に行った。そこで酒を大瓶と小瓶を買った。そして何故か漁陽を出て沙陀族の集落へ向かったのだ。

王基は大甕を背負い悠々と、玄徳は小甕を持ってびくびくとしながら集落に入り込み中央の広場に座り込んだ。

遠巻きに集落の者が視ている。殺意や憎悪にまみれた視線が突き刺さる。これには玄徳も閉口した。何か喋れば殺されそうだと。

そんな中、一組の男女が近づいてくる。明らかな異貌だった。男は眇で金砕棒を背負い、女は重瞳で蛮刀を帯びている。二人とも動物の毛皮を用いた服を着ており野性的な格好をしている。

「何の用だ、漢人」

負の感情が詰まった低い声に玄徳は震えた。

怖い、怖くてたまらない。もしかすると、ここで死んでしまうかもしれないのだ。恐ろしくて男を見れない。

「なに、酒盛りに参った。一献どうだ？」

相手の感情を歯牙にもかけず、まったく大瓶を置く。普段と何ら変わらない声音は玄徳に安心を、男には苛立ちを与えた。

「酒盛りならば他所でやれ」

「そうカリカリするな。これは中々に良い酒だぞ」

限界だった。この太たい男を叩き潰すと背中の中金砕棒に手を伸ばす。

「あつあの！ お酒、一緒に飲みませんか？」

一触即発の状況に玄徳は必死に割り込んだ。ぷるぷると震えながら甕を差し出す。

その姿にすっかり毒気を抜かれ、なし崩しに宴会になった。遠巻きに見ていた者が酒に釣られてやってくるが明るい雰囲気とは言えない。玄徳が笑顔で注いでいるのが唯一の清涼剤だ。

「やはり、鬱憤晴らしにはこれだろう」

王基は腰の刀を投げ捨て広場の中央に立つ。

「今、俺を気に入らんとした者すべてと喧嘩致す！ 漢だろうが沙陀だろうが関係なし！ 喧嘩無礼講と参ろうか！」

王基の一喝を受けて一人、また一人と立ち上がる。そしてほぼ全員がおもむろに立ち上がり王基に殴りかかる。

「え、ええっ！ な、なんで喧嘩になるの！？」

慌てた玄徳は止めようとするがその前に女が立ち塞がる。

「やめときな、お嬢ちゃん。野暮ってもんだぜ」

「で、でも喧嘩は良くないです！」

「じゃれあいだよ。誰一人、武器を持ってない。私たちは酒でも飲

んで野次でも飛ばせばいいのさ」

女は喧騒から少し離れた場所に腰を下ろす。そして懷から皮の袋を取り出し玄徳に渡す。受け取った玄徳は首をかしげて袋を見る。触った感触からは液体が入ってる事しか分からない。

「あの、これは？」

「アタシたちが愛飲する酒さ」

飲んでみなよと悪戯げな笑みで言う女の言う通り皮袋の縛り口を解き、口をつけて傾ける。

「げほっ！！」

口内に広がる独特の臭気と酸っぱい味に蒸せ反る。

「ぶわあっはは！　初めてなのに勢い良くあおるとは剛毅だぜ」

「ひどい！　先に言ってくれてもいいじゃない！」

涙目で玄徳は女を睨む。だが女は悪びれもせずに笑う。睨む玄徳は気がつく。女の瞳が重なっている様に見えるのだ。

「わあ、重瞳だ」

「……別に瞳が二つある訳じゃない。色が変わだから重なっている様に見えるだけだ」

女は自嘲気味に呟く。漢では重瞳は貴人の相と言われるが沙陀に暮

らす彼女には差別の要素でしかない。

「ふふん、私だって。ほら、福耳なんだよ！」

「ぷっ　くっくく」

見て、見てと手で耳朵を強調する玄德に妙な可笑しさを感じ遂には笑い出してしまう。

変な奴等だ。漢人の癖にアタシたちに蔑みを持ってない。

いつの間にか喧嘩も終わり男たちは武を讃え合い笑っている。中心には王基がいた。誰よりもボロボロなのに、誰よりも大笑いしている。これでは文句の一つも言えない。

少し離れた場所では玄德が背囊から干し肉を出して女子供に配っている。ニコニコと柔らかく暖かい笑顔は女子供の警戒心を解いている。

誰も彼もが二人の漢人に酔っていた。

宴会は続く。老若男女を巻き込んで、愉しげに、優しげに。

朝である。紛うことなき朝日が王基を照らす。背中には熟睡している玄德を背負い漁陽に入る。宿に向かうが足取りは重い。何も言わずに女を連れて朝帰り。女心に疎い王基ですら分かる。怒っているだろう、確実に。

宿の扉をゆっくり開けて先ずは玄德と伯珪の部屋に行く。寝ていないのだから目の下を真っ黒にした伯珪に玄德を渡し早々に自室に向

かう。

別に悪い事をした訳ではないのだから普通に入るか、と扉を開けて入ると鬼がいた。

いや、鬼の形相をして大刀を持った愛紗がいた。

「……待つていたぞ。一晚中な」

「まずは話し合おう。その大刀を置け。そして落ち着け」

「落ち着け？ 私は落ち着いてる。とても冷静だ。こんなにも澄んだ気持ちは初めてだ。今なら百人や二百の敵は物ともしない」

「待て、待て。俺はやましい事など何もしてない。本当だ」

「なら昨晚はどこにいた？ 大方、玄德殿と……」

「昨晚は沙陀の者と宴会していた。玄德も一緒だったぞ」

「は？」

これには愛紗も面食らい絶句する。そして理解するうちに怒りが湧き出す

「そのような危険な場所に玄德殿を連れていくなど言語道断！ そこに直……」

怒鳴り説教をしようと王基を視ると既に寝台で寝ている。気を削がれた愛紗は寝台に乗り王基の顔を指でつつく。

「この歳で私を寡婦にするつもりか……バカ……」

一晚寝ていない愛紗も眠気に負けて眠りに就く。心配させた罰として王基の腕を枕にして。

二日後、劉曄が張世平の返書を持ってきた。それを読んだ王基は儁父と愛紗、伯珪を連れて中山に向かう。四日かけて中山に着いた王基達は張世平の元へ赴く。
立派な屋敷にて出迎えたのは壮年の男二人。

「ようこそ、王伯與殿。準備は出来ております」

「無茶を言つてすまないな張世平殿。こちらは張儁父と公孫伯珪、関雲長だ」

「私は張世平、お見知りおきを。これは蘇双。それでは公孫伯珪殿はこちらへ。蘇双、お客様を客間へ」

品の良い部屋に案内されて三人は椅子に腰掛ける。
儁父は部屋を眺め、実力のある商人の部屋だ、と思う。何でも高級な物を揃えるのではなく雰囲気を大事にしたこの部屋は、金の使い方を知っている者の証明の様なものだ。
茶を喫しながら蘇双と世間話に興じる事数刻。
伯珪と張世平が戻ってきた。

「うつ……本当に、ほんとーに大丈夫なんだな？」

「うむ、大丈夫だ。駄目でも一緒に死んでやる」

「はあ……ほら、これだ」

青白い顔をした伯珪から竹簡を、張世平から嚮を二つ受け取り早々に屋敷を出る。

中山の街を出て直ぐに農民が三百人いる。これは張世平の私兵だ。全員、農民の格好をさせ義勇兵を装わせている。既に劉曄に中山で賊を討つために義勇兵が起ったと適当な粗筋を漁陽で流させている。三百の兵もどきを率いて漁陽へひた進む。昼夜兼行の行軍で三日で漁陽へ着き、手早く太守に目通り願うとすぐさま官庁に呼び出された。

漁陽太守の焦触は焦っていた。普段は民からの税を貪る事しかしていない男は賊に対して打つ手が何もなかった。部下に五千の兵を持たせて討伐に当たらせたが戦う前から離散し士気も低く、立ち往生している所を攻められて這う這うの体で逃げ帰ってきた。

仕方なく幽州刺史の劉虞に救援を頼んだが反応は無く、もはや万策尽きていた。

そこに義勇兵の報せが入ってきたのだ。歓喜し、だが失望した。たったの三百の寄せ集めに何が出来ようか。

失意に暮れる彼に義勇兵の頭と思わしき男と女が三人、拝謁しにきた。

「お初御目にかかります。王伯與と申します。この度は義憤により兵を挙げさせて頂きました」

「その方の義心は痛み入るが、三百ではな……」

「はい、故に協力を求めました。これをご覧下さい」

差し出された竹簡を取り、読む。
文字を読み下し印を確認する。

「なるほど、公孫家も兵を出してくれるのか。だが……」

「二千の騎兵を出してくれるとの事です……右北平は不作続きで兵糧が足りず、みどもの兵も武装すらない有り様。何卒、御援助いただきたく」

「ふむ……」

王基は密かに伯珪に目で合図を送る。合図を受けて伯珪は前に出る。

「私は公孫伯珪。公孫家の長子です。我ら、公孫家は戦果は入りません。ただ兵糧が欲しい」

有能な士なら詐計と気付くだろう。凡百の士は半信半疑だろう。無能な士は信じるだろう。そして焦触という男は果てしなく無能だった。いつか自分は中央に返り咲くと夢想到に浸り、親の金で今の地位を買った真正正銘の無能。甘い言葉の裏を確かめずに飛び付いた。

「よし！ 兵糧に武具に馬、援助しよう」

「有り難き幸せ」

面を伏せ包拳礼をする。そして滞りなく拝謁を済ませ宿に戻った。

「くっはっは。某は感動しましたぞ」

「……………」

愉快、愉快と笑う儼乂と対称的に苦々しく顔を歪める愛紗。どうにもこれでは詐欺の様ではないか、という思いが心を苛む。

「……幸村。やはり、こういうのは良くないと思う」

「何が良くないのだ？」

「こっ、人を騙すような事だ！」

「いけないのか？」

「は？」

「人を騙す、人を殺す。確かに悪事だ。言い訳のしようがない。そして俺は目的の為に最善の路を選んだ。それが悪だろうと責は常に首で負っている」

さも深い鈍色の如く善悪を受け入れた瞳はどこまでも冷たい表裏比興の貌。愛紗も分かつてはいた。綺麗事だけではなにも成せない。

「王基殿は……いや、某はもう休ませて貰おう」

「良く休んだ方が良くぞ。厳しい行軍になる」

雋又が部屋を去ると重い沈黙が部屋を覆う。

「駄目か、愛紗？」

「いや、よく言えば私も何が悪か分からない身だ。貴方と共に善悪の彼岸を見極める。それも悪くない」

「ああ、確かに悪くない、な。悪くない」

「ま、待てっ 何故押し倒……だめえ」

盛り始めた室内に背を向けて歩きだす。雋又は声無く蜷い脳裏に師匠が言っていた事がよぎる。

斬りたいと思った者を斬るより、斬ってみたいと思った者を斬れ。

ああ、ああ！ この言葉はなるほど道理だ！

「ふふっ 楽しみだ。楽しみだなあ」

笑み崩れた彼女はただ、遠く剣戟に想いを馳せていた。

草原に生きる者の友にして家族。武士にとっては刀と鎧の次に大切なモノ。

馬である。

太守から援助の品を受け取り、馬は厩舎から連れていっていいと言

われ厩舎に向かう。普通の厩舎と装飾過多な厩舎の二つが並んでおり王基達は普通の厩舎に通される。そこから馬、五十頭を受け取った。これでもうここには用が無いはずだった。

だが王基は隣のやけに豪華な厩舎が気になって仕方がない。こつそりと中を覗き込む。

ドクツと心臓が大きく脈打つ。豪華な厩舎には一頭の馬しかない。赤毛で八尺の巨馬。前漢の武帝が大宛にまで兵を遠征させてまでも欲しがったと言われる馬。

汗血馬がそこにいた。

「なんと、勇壮な馬だろうか」

「凄いでしょう」

振り向くと籠に大量の野菜と果物を入れた兵士が立っていた。

「ああ、見事だ。まさしく天馬だな」

「ですが気性が荒くて人になつかないんです。近づいただけで蹴り飛ばされますよ」

「誰も乗ってないのか？ 勿体無い」

「帝から賜ったらしいですけど、実はただの厄介払いだったって話です」

兵士は、酷い話ですと沈鬱な眼差しを厩舎に向ける。

「……よし！ 決めた、決めたぞ！ 任せておけ。俺がどうにかしてやる」

高笑いして去っていく王基を兵士は不思議そうに見送ってから、気合を入れて厩舎に入っていた。

劉玄德には夢がある。

誰もが笑顔で幸福な世にしたいという貴く眩い理想。だが、これから行う事は夢と真逆の所業だ。

穹廬に集まった三人の話は詰に入っていた。厳格な片目の男 朱邪赤欒と気ままな重瞳の女 朱邪大眼。そして玄德の三人は交誼を結び、事を説明した。

「ですから、あなた方の太守に奪われた馬を取り返します。だから、赤峰の賊の討伐に協力してください！」

必死に頭を下げる彼女を二人は困り果ててしまう。沙陀の長とその妹としては断らなければならない。

だが、個人としては気に入っているのだ。この娘も、あの男も。それでも自儘にする訳にはいかない。

「聴くところによると賊は千人はいるのだろうか？ 我ら沙陀族で戦えるのは百人程しかない」

「そーいうこった。アタシも勝ち目のない戦はご免だね」

数は力だ。沙陀の屈強な戦士百人揃えても、千の賊に敵わない。

「確かに、数は劣ってます。だけど……だけど！ 勝っている所も在ります！ 例えば、関雲長さんに張雋父さん。二人の豪傑が付いてます。私の友達の公孫伯珪ちゃんも腕は立ちます。それに、ご存知の王伯與さんもいます」

「そうか。だが……この討伐を失敗すれば我ら沙陀族は滅びるだろう。それでも、尚も拳兵を望むか？」

とてつもない重圧が玄德を襲う。手が震えて齒の根が噛み合わなくなる。これこそが人の、沙陀族の重み。

出来るならば逃げ出したい。弱い心がざわめく。止める、辞める、やめる、ヤメ口。貧しく愚かな小娘になにができる。

心に弱音が溢れだすが、逃げ出す事だけはしない。震えが止まらなくとも、うつ向きはしない。

決めたのだ。もう、決めたのだ。

「中山靖王劉勝が末裔、劉備。沙陀族の命運お預け下さい」

覚悟を決めた。

「くくつあつはっは。いいんじゃないの、兄貴？ 少なくともアタシは行くぜ」

「勝算がない。同胞の命を無駄にはしたくないのだ」

「勝算はある」

「伯與さん！」

穹廬に入ってきた男は相変わらずの不敵の笑みで机の上に持っていた地図を広げる。

「これは華陀と華児に作らせた地図だが、漁陽から赤峰まで至る所に潜むにうつてつけない森や山がある」

「伏兵か？　だが……」

「否、奇襲よ。陽のある内は潜み、夜に移動する。偵察の目をかくぐり赤峰の本隊を奇襲する」

「待ちなよ。隠れながらじゃ、せいぜい数十人の兵しか連れていけねえぜ。奇襲しても逆撃されて終わりだ」

「そうだ。だから、心を攻めるのだ。完膚なきまでに心を挫く」

素敵だろう？　と笑う男を皆、啞然と視た。

たった五十人足らずの集団が草原を進む。張世平の私兵は武装と食糧を持たせて蘇双に引継ぎ帰らせた。契約には戦闘行為は含まれていない。

僅かな星の明かりのみを頼りに徒で行軍する。先頭は王基が立つ。

真田の時より培われた方向感覚は健在であつた。どんなに暗くとも目的地に向かつて歩く能力は中々に得難い。暗闇では先ず心を試される。様々な疑心暗鬼を乗り越えて、尚も進むのは難しい。

だが、先頭を歩く王基の背には迷いは無く、後に続く者に限りない安心感を与える。劉曄を斥侯に出して敵の目を避けながら進む。

「ねえ、大眼ちゃんは戦場初めてじゃないの？　なんか慣れてるみたいけど」

「まあな。殺し合いには慣れてるぜ」

首をかしげる劉備に、艶のある邪な笑みを張り付けて言う。

「アタシはな、楊家の娘だつたんだ。それを賊に襲われてな。逃げ切れたのはアタシだけだった。一応、良家の娘だつた私は生きる術を知らなかった。示された道は二つだけだった」

「ふ、二つつて？」

「知らない男に股を開くか……ぶつ殺すかさ。紆余曲折で沙陀族の長の娘になつたのさ」

「……初めて……初めて、人を手にかけた時は……どんな気持ちだったの？」

消え入りそうな劉備の声に、大眼は淡々と答える。

「別に……何か想う暇もなかったさ」

「……そっか、大眼ちゃんは後悔してるんだね。だから、そんな悲

しい顔をするんだ」

「後、悔？　そんな訳が……」

「うっん、きっと大眼ちゃんは優しい、強い女の子なんだね。口で何を言おうと分かるよ」

「……本当にアンタは変な奴だ。よし、アンタはアタシの後ろにいな。お守りしてやる」

「うん、ありがとう。でも、私も戦うんだ。他の誰でもない私の意思で」

安穩とした二人の後方。最後尾には不思議な空間が広がっていた。

「……どうしたんだ、儁乂殿。やけに機嫌が良いが？」

「ん？　ああ！　そうですね。某の夢が叶うといいますが、まあ、そんな所です」

鼻歌を歌いだしそうな程、上機嫌な儁乂を不審げに見て愛紗は先頭に向かう。

その背中に儁乂が嗤いながら呟いた言葉は誰の耳にも届かずに流れていった。

昼間は忍び、夜に移動する。慎重に、されど迅速に。赤峰まであと数刻といった森の中。秘策の蓋を開ける。

「良いか、この甕の白粉を首まで塗り、この甕の紅で目鼻を強調せよ！」

作戦の要は敵の心を折ること、そして賊将の首を取ることだ。そのために必要なことは圧倒する事だ。力の差を見せつけるか、或いは人ならざる者　　言わば神仙の類と相対した時だろう。

「劉曄、お前は遊兵だ。逃げる将が居たら討ち取れ」

「りょーかい」

そして王基は兵の様子を見る。沙陀の兵は皆落ち着いている。赤欖や大眼の人徳の賜物だろう。愛紗と雋父は淡々と準備を進めている。一番の問題は、伯珪と劉備だ。二人とも震えている。武者震いなどではない。ただ恐怖に震えている。

王基は二人に話しかけることもせず、ただ一番安全な最後方に配置する。

戦が怖くない者などいない。もしいたとするならば、それは狂人か、廃人か、死人か。

少なくとも王基には戦が恐くなくなる様な言葉は持ち合わせていない。

「往くぞ！　我等は今より泰山府君の臣となる！　路を塞ぐ愚者には死を！　逃げる者には慈悲を！　社公の名に恥じぬ戦い

をせよ！」

黄昏に紛れて多くの黒い影が駆け出す。目指すは赤峰。異相の衆はひた駆けける。少しの不安と興奮を抱えて。

おまけ／司馬仲達の日／

司馬仲達の朝は早い。陽が昇る前に起床し、朝食の支度をする。無駄なく、無理なく、鮮やかな手並みで朝食を作り上げる。

司馬の庵には今は父である司馬防しかない為に作るのが楽でいい。姉は仕官に出ていき、妹たちは修行と言う名の旅行中だろう。

僥倖だった。もしも、姉妹がいたならば彼に目をつけられていただろう。姉妹とは不思議なもので同じモノが欲しくなる事が多々ある。だから本当に僥倖だった、と司馬懿は思う。

洗い物を済ませ庭で琴を弾く。旋律に想うは一人の男。緩やかで奥深い曲調がピタリと止まる。目の前に二匹の白蛇が絡まっていたのだ。それを司馬懿はうっとりと眺める。

「吉兆ね……ああ、羨ましい」

白蛇は更に激しく絡まり合う。蛇の生殖行為を司馬懿は彼と自分に置き換えて悶える。

数日間ずっと繋がって絡まるのだ。想像だけで達してしまいそうになる。昼過ぎまで妄想に浸り耽り、夕食の準備の時間にようやく動き出す。

司馬家の食卓に会話はない。いつもならばただ黙々と食べる。だが今日は司馬懿が話した。

「お父様、折入って話しが……」

「何だ」

「兵を頂きたいのです」

「兵……だと？」

「はい。お父様の影兵が欲しいのです」

「影兵は司馬の長が率いるのだ。お前ではなく朗が継ぐ」

「私の方が巧く使えます。謀り事は私が一番秀でていますかと」

静かに事実を告げる彼女の口調に司馬防は懷から印綬を取り出して司馬懿に渡す。

「それを以て何を為す？」

「言わずもがな、でしょう。お父様？」

「そうだな、愚問だった。懿よ、久しぶりに胡弓が聴きたい」

「春華お母様の曲ですね。お任せください」

食後の一時に美しい胡弓の音が奏でられる。全てを塗り潰すような深い音色が庵を包み込んでいった。

悪鬼

山の中腹の砦。見張りはやる気なく立っていた。幾多の斥侯隊を出しているのだ。敵がくる前に斥侯が気付く。正に形だけの見張り。晩の肴と酒を楽しみに男は見張りを続ける。

日も暮れてきた頃、そろそろ篝火を焚こうと準備を始めた時に黒い影を見つけた。斥侯の部隊かと松明に火を灯しよく視る。

女だろうか、よく視えない。勢い良く近づいてくる。だが走っては
いない？ 歩いている様にゆっくりな動きのに恐ろしく速い。

変だ、と思った時には遅かった。中に声を掛けようとしたが声ではなく空気の抜けた音しかでない。やけに首元が生暖かい。確かめると手が真つ赤に濡れた。呆然とする男の前に影が現れる。美しい銀髪
の女。顔は異常な程白く、朱が端麗な目鼻を妖しく際立たせている。男はそれに魅入られ恐怖に震えた。女は震える男に持っていた短刀を胸に螺込む。崩れ折れる男を一瞥し後から追いついて来た集団
へ向く。

「じゅじん、てきみはり、はいじよ」

「ご苦労、劉曄はここに潜み逃げる敵將を討て」

「りょーかい」

「俺は突入後に敵將を捜す。後は任せた。好きに暴れろ」

「なに？ あっ 待て！ 幸村！」

もう話す事などない。懐かしさと熱さに導かれ王基は駆け出した。

何もない村だった。

記憶の中の村は、面白くも無い農村だった。

だから、ガキの頃は退屈でしかたなかった。退屈から逃げる様に、棒を振るっていた。鍬など振らずに、これで生きてやる、と幼いながらに誓った。

そうだ、強くなりたかった。

強い英雄になりたかった。だが……彼女に出会った。暖かくて、優しい、愛しい女。

彼女の為なら、誓いも棄てれた。

武器を捨て、鍬を振るう毎日。

悪くなかった。いや、幸せだった。彼女に子供が宿り、幸せの絶頂だった。そして村に課された夫役の任の為に数ヶ月、村を離れた。辛い夫役も彼女を思えば、なんてことはなかった。

夫役を終えて心軽く村に帰ったが、人気がない。胸騒ぎに推され、一目散に自宅へと戻る。

汗が止まらない。

喉が、口が渴く。

鼓動が大きく胸を打つ。

玄関に入る。

いつも聴こえる彼女の声がしない。彼女の匂いがしない。代わりに

臭うコレは

部屋に入る。

いつも彼女が特等席と言って座っている場所。彼女と肩が触れて、

はにかむ彼女が全てを癒してくれる最高の場所。

そこを視ると彼女がいた。真っ赤に染まった裸の彼女が臥していた。陵辱されて腹を真一文字に斬られ胎児を掻き出されて。必死に腹を護ろうとしたのだろうか、丸くなる様に息絶えている。

何故か涙が出ない。只、声が漏れる。

男は骸の前で言葉にならない叫びを上げることしか出来無かった。

共に夫役に行っていた男衆と、村の皆を埋葬する。誰もが死んだ瞳で淡々と作業を進めた。

全てを奪われた。何もかもを失くした。

それでも、家を、故郷を、思い出を捨てられなかった。

太守に賊の討伐を願ったが、一蹴された。

もう、何も出来ない。

鍬を振るう理由を無くした。槍を振るう誓いは棄ててしまった。

ならば、ナニに為ればいい？

ナニに……

に為ればいい。

人の形をした何か、は村を離れた。

唯一、求めるモノを追いかけて。

まだ、生きている。

男は口に出さずに呟いた。

頬は瘦けて、落ち窪んだ昏い眼。

悲愴も喜色も無く、ただ闘志と呼ぶには仄暗い気概のみがぎらつく顔をして。男は気だるげに周りを見渡す。何の変哲もない只の穹廬。

だが穹廬の外からは命の絶たれる音と断末魔と情けない悲鳴が聞こえてくる。

ゆっくりと愛用の槍をとる。

分かる。外の奴等は今までの弱兵じゃない、と。

分かる。此処に向かっている、と。

笑う。望んでいたことだ、と。

そして待ち人が来た。神秘的な美しさを孕んだ刀を持って、顔は異常に白く眼や口を強調するように紅が彩っている。その様は天人か、仙人か。

「ようやく来たな。だが、只では逝かん。一人でも多く殺してやる」

「泰山府君より遣わされた。ただ、私事により御首貰いうける」

重心を下げて槍を構え、間合いを測る。刀で槍に勝つのは至難だ。間合いが違いすぎる。その利点を活かす距離までギリギリと詰め、ピタリと止まる。感覚が告げる。ここが最良の位置だと。

敵と槍に全ての意識を注ぎこみ、互いに呼吸を見極める。天幕内に張り詰めた闘志が鬨ぎあう。

穂先に力を籠める。

放たれる突きは正に神速。

一刺懸命の極に致る。

刹那の間に胸を穿つ

筈だった。

その必殺の突きは穿つ事なく敵の頬を削るのみに至った。申し分のない気迫だった。しかし、如何に速かろうと初動より早く躲せばいい。

王基は五体を地に伏せる様に槍を躲し、掬い上げる様に刀を振り切る。

速さのため鉄芯を入れていなかった槍は中程からバツサリと断ち斬られる。

「ようやく、終わりか」

安堵に顔を緩めて男は力を抜いた。手から落ちた槍が、哀しく響く。過ぎるのは幸せな日々の思い出。

彼女と見た景色。彼女と交わした言葉。彼女と

「逝け」

刀で無造作に、だが的確に首を薙ぐ。凄まじいまでの切れ味で首の骨も容易く断ちきるとゴトリと首が落ちた。未だ止まらない心臓が切り口から血を噴き上げ、身体がゆっくりと倒れる。落ちた首はあまりにも安らかな顔をしていた。

浮世は地獄でしかなかったのだろう。だが死ぬことも選ばず、殺されるを待ったのは何故だろうか。王基には分からなかったが悪い死に様ではないと感じた。出来うるのなら自分もこの様な面相で逝きたいとさえ思った。

「お見事です、王基殿。武人ならば胸が熱くなる様な死合いでした」

「僞人、か。もう終わったぞ？」

穹廬の入り口に立つ彼女は嗤っている。酷く勘に障る、舐めあげるような笑み。そして身体に巻き付いている龍を構える。

何かと思えば龍を模した縄標だった。縄の片方の先端に槍の穂先を付け、もう片方の先端に龍の頭のような鋌を付け、縄の部分には細かく鉄管が通してある。

「某には夢があります。幼い時に父母から聞いた英雄というものをこの手で殺してみたいのです。ですが、英雄は皆、墓の下です。落胆しましたよ。そう、貴殿に会うまでは」

爛々と輝く瞳は狂気に彩られている。一挙手一投足たりとも見逃しはしないと強く見つめている。

「正確には、貴殿の策を聴いてからですが。某は確信しました。貴殿も英雄なのだ、と。古の英雄と違うのは、名声が無いだけ。今はまだ某だけの英雄」

「ふん、俺が英雄だと？ 英雄がなんたるかも知らんのか！」

「英雄とは名将、勇将でしょう？ 楽毅や白起の如し」

「やはり、な。何も分かってない」

「ならば、ご教授願いたい。貴殿にとって英雄とは！？」

「英雄とは人を救う者なり！ 楽毅、白起。なるほど、名将だ。だが、英雄ではない」

「ならば、彼女達はなんだ！」

「決まっていよう。人殺しだ」

静かに深く、沈むかの如く染み入る声が倭人を苛立たせる。

「ならば貴殿はなんだ！」

「俺か？ 俺はな、武士（悪鬼）だ」

最早、問答は無用とみた倭人は構える。縄標を弛く握った片腕をだらりと前に出して脱力しきった構えは隙だらけのように見えるが、王基は踏み込まなかった。いや、踏み込めなかった。

「貴殿はここで死ぬ。否、殺す。某の、某の為だけの英雄として……大丈夫。貴殿は優しく、丁寧に殺してあげましょう」

ゆらりと近づく倭人に、王基は刀を正眼に構えたまま動かない。否、動けない。

何故ならば槍とは違い予想がつかないからだ。縄標の動きが予想出来ない。

倭人は王基から二丈（約7m）は離れた場所で止まる。倭人はだらりと垂れていた手を勢い良く反す。

「……っ！？」

迫る槍身を避け、踏み込もうとした時。えもしれぬ悪寒が身を駆けた。咄嗟に後ろに跳ぶ。今まで居た位置に龍の頭を模した鎚が叩きつけられている。

「凄い……完全な死角から落としたのですが。流石ですね、王基殿。ですが……分かったでしょう？ 某の龍縄には勝てない、と」

勝てない云々よりも、不利である事は否めない。生半可な防御をしても絡め捕られるやもしれず、直線的な動きではない為に死角がとられやすい。何よりも間合いが違いすぎる。

「侮るな、傀儡。戦うならば勝つ。それが信条だ」

「残念だ……ならば嫩り殺しにさせてもらおう！」

傀儡が舞う度に龍が翔ける。縦横無尽に尾の槍が、頭の鎚が王基の命を付け狙う。縄の部分の鉄管が擦れてシヤラシヤラと音楽を奏でている。龍の尾を身を反らして躲す。だが、首を浅く斬られる。傀儡はニヤリと嗤う。今ので殺せたぞ、と笑みが物語っている。傀儡にとって最早、闘いではなく遊びでしかないのだ。

「……」

それは王基の闘志に油を注いだ。

翔び廻る龍は尚も浅くしか王基を傷つけない。意を決して滑り込むように龍の舞に跳び込む。頭を下げる様に尾をはずし、身を捻り頭を躲す。ようやく刀の間合いに捉えた。

殺ったか！？

渾身の袈裟切りが傀儡を縄ごと断つ
甲高い鉄の反響音と擦過音が高鳴る。

「ぐっ!？」

「ふふ……この龍縄は近距離も対応出来る。この様にな!」

縄部分を保護する為だと思っていた鉄管を引き絞ると鎚にも、槍にもなる。

そして、鎚で体勢の崩れた王基の肩を思いきり振り抜く。

鈍い音と共に後方へ吹き飛ぶ。

「そろそろお分かりになったでしょう? 貴方は私には勝てない。

武力だけで言うならば雲長殿にも大眼殿にも勝てない。龍や虎が虫に負けることはないように」

「くっく、ははは。何時であろうと、我らは取るに足らぬ存在よ。

成る程、俺は虫だろう。だが、龍や虎でさえ殺す猛毒を持ち合わせているやもしれん。精々気をつけろ」

最早、左腕は感覚がない。折れたのだろうか。右手の刀を強く握る。勝ち目など限りなくない。だが、いつもの事だ。悪くない。

「外が静かになった。名残惜しいですが、さよならです」

勝負は一瞬。龍が雲を掴む前に叩き落とす。それしかない。

刀を片手上段に構え、迫る龍の頭に向かい踏み込み、龍の頭が鳩尾にめり込む数瞬前に柄を叩き衝ける。反動で刀を吹き飛ばされるが龍の頭は力なく地に転がる。

「なに!？」

「雲を掴めなかった龍を、なんと呼ぶか知っているか?」

縄を強く踏む。尾の槍が飛んでくるが焦ったのだろっ。真っ正面からくる槍を右腕で受け止める。

弾ける血潮に顔を歪めるが、儼又に肉薄する。

「そんなものは只の鯉だ！ 龍たるならば！ 俺如きに負ける道理なし！！」

窮鼠猫を噛むの言葉の様に飛び掛り儼又を組敷く。かろうじて動く右手で狙うは急所、もっとも柔らかい眼球に手刀を突き落とす。

「ああああ、あ、あ、あ！！」

グチャツと音がした右目からの激痛に絶叫を上げる。儼又は目に突き入れられた手を掴み、物凄い膂力で右手を引き離す。無事な方の目に憤怒を燃やし睨みつける。

殺す！ 殺してやる！

溢れる怒りに儼又は直ぐ様、動いた。

龍縄は使えない。ならば、どうする。

王基は本能の赴くままに首に喰らい付こうとする儼又を右肩で受け止める。

「ぐあっ！」

歯が皮を破り、肉を抉り、血管を裂く感触が王基を責める。肩から口を離れた儼又は血と肉を咀嚼しながら外を一瞥し、龍縄を持ち一目散に駆けて行った。

「幸村！ 何処にいる！ 幸村！ 幸村！？」

入れ替わる様に入ってきた愛紗を見た時に、王基は意識を失った。

愛紗が大刀を振るえば胴が分かれ、大眼が蛮刀を振るえば首が飛び、赤櫓が金砕棒を振るわば挽き肉が出来る。それに加え、顔に施した紅い紋様が異様な雰囲気醸し出している。

「我等は泰山府君に遣わされた社公だ！！ 死にたくない者は去れ！」

「に、逃げろ！ 化物だ！！」

良く徹る澄んだ声に腰砕けになり賊は悲鳴を上げて逃げて行く。

「くっ！ そっという策だと分かっているが……」

乙女としての心情が化物やら化生と呼ばれ著しく傷ついた。一番槍の王基と雋父は敵將を探しに行つてしまい、仕方なく愛紗が声を張り上げたのだ。

「まっ、気にするなよ。化物さん？」

「朱邪大眼、と言ったか。貴様には化生が似合っているぞ」

横目で交わす視線にはお互いに溢れんばかりの嫌悪が籠っている。そもそも、お互いの価値観が違う。騎馬民族と漢民族は長年争ってきた。騎馬民族は弱肉強食を根底に生き、漢民族は儒教を根底に徳を重んじて生きる。故に、漢民族は蛮人と蔑み、騎馬民族は軟弱者と誇る。こうして両者は犬猿の仲になった。その縮図が愛紗と大眼だ。

「お、落ち着いて、二人とも！　　雋父さん達を探しに行かなきゃ
！」

初めての戦にうわついていた劉備が間に入り停める。そうして、どうにか停まった二人は同時に敵地の奥に振り向き、身構える。

何か来る。

ひたひたと押し寄せる気配。薄ら寒い濃厚な死の気配。

黄昏の色に溶け混まない虚無の集団。それは正に生ける屍のような不気味さを放っている。

土気色に近い顔色に薄汚れた格好の男達が二十人ばかりの隊。

「吞まれるな！！　　敵は寡兵だ。押し包んで討て！」

赤纓の言葉を嘲笑うかのように敵兵はがむしゃらに突き進み、己が命を簡単に投げ出して相殺する。愛紗達のような猛者なら一撃で葬るが、一瞬で命を奪えない者は冥府まで付き合わされる。腹を貫かれたら、貫き返し、肩を斬られたら、斬り返す。十人もの沙陀兵が道連れにされた。

「な、なんだ！？　　こ奴らは！」

まるで理解が及ばない。まるで死ぬ為に戦う敵。このような敵がまだいるとしたならば。

「幸村！！」

愛紗は急ぎ奥へ駆けていく。その背中を見送った劉備は呆然と周りの惨状を見る。目指すモノとは真逆の景色が胸を抉る。

結局、一人も倒せなかった。目の前で腸や鮮血が飛び交うのを見ていただけだ。

意気消沈する劉備はふと、伯珪の方を見る。

「伯珪ちゃん！！」

既にこの辺りには敵がいなかったと思った沙陀兵はバラけて探索に当たっていたのが裏目にでた。伯珪の後ろで息絶えたはずの男が幽鬼の如く立ち上がったのだ。右手に剣を持っているのを確認した劉備は既に駆け出していた。伯珪は竦んで動けない。

伯珪ちゃんが死ぬ。

私塾で仲の良いお友達でいつも気遣ってくれた優しい女の子。だが、いなくなってしまう。

そんな恐怖に似た焦燥感に晒されて劉備は遮二無二、剣を突き出す。グニユッと少しの抵抗の後は一気に背から腹を貫く。

「あ……！！」

硬くて柔らかい命の感触が手から伝わってくる。倒れる男から自重で剣が抜け、血が流れる。それを見下ろした劉備は瘡の様に震え始めた。

「あ、あ……うう。伯珪ちゃん」

「あ、あう。大丈夫、大丈夫だ。玄德」

二人はきつく抱き合った。バラバラになりそうな心を繋ぎ止めるために、きつく、きつく抱き合った。

ゆらゆら、ゆらゆらと身体が揺れる。鼻腔を擦る甘い匂いも相まって意識がどんどん墜ちていく。

「おい、伊助。大丈夫か」

「だ、大丈夫でさ。源二様は？」

「うむ、大丈夫だ。それよりも血が熱くなるな。戦は我らが武士の華だからな」

「百姓のおらにはわかりませんだ」

「はっはっは！　そうだな。だが戦になったら敵か味方しか分け

られん」

夢だ。城を内緒で脱け出して勝手に初陣を切った時の夢だ。戦は華々しくて武士の栄光の場だと思っていた青臭い小僧の時分の夢。

「だども、おらには戦ってやつが良いものには思えねですだ」

「何を言う！ 立身出世に魂を懸けた死合い。これ以上の場はないぞ」

山道を歩きながら話す幼さの残る男子とどこか冴えない中年の男。男子は真田源二郎、男は伊助。百姓足軽の伊助は本来大名の息子の源二郎とは接点がない。だが、生来腕白な源二郎は城にいる事の方が少ない。糧食や酒を持ち出して百姓の家に泊まり込む事が多かった。源二郎は気弱だが芯の通った伊助と酒を飲むのが好きだった。そんな不思議な縁の二人は戦場で再会したのだ。足軽に扮した源二郎を見つけた伊助は驚き、何故ここに居るのか話しかけた。源二郎は瞳を輝かせて一言、初陣とだけ答えた。それだけで内密に来たと察した伊助は決意した。一身を賭して源二郎を守ろうと。

戦は熾烈を極めた。その中を若さに任せて割け入る少年とへっぴり腰ながらしっかりと着いていく中年の男。いくつかの首級を挙げて意気揚々と帰り道に着いているのだ。しかし伊助の顔色が悪く先のやり取りに至った。

「源二様、村にお越しくだせえ」

「む？　　うむ、構わんが……」

普段の気の弱さが嘘のような伊助に源二郎は少し戸惑うが大人しく着いていく。戦勝に浮かれて足取りは軽い。

伊助が案内したのは伊助の村だ。よく源二郎も遊びにくる農村。だがいつもの活気がない。浮き足立つ源二郎でさえ分かる。

「おい、伊助。皆はどうした？　　せっかく戦に勝ったと言つのに暗いな」

「源二様、あの家を憶えてまするか？」

「ああ、親子三人が住んでいるだろう」

「ちょっと覗いてみますだ」

よく分からないが伊助と家を覗きにいく。木戸を少し開けた先には囲炉裏がありその前に蹲り啜り泣く人影が見えた。

「彼等は今回の戦で息子を亡くしたですだ。いつも戦が終わって笑うのは御武家様だけですだ。源二様、おらは学もねえ百姓だとも戦はいけないものだと思いますだ。おらたちは、おらたちは、手柄よりも平穏が欲しいだ！！」

「……」

晴れやかな気分は翳りだす。誇らしさは罪悪感に、達成感は虚無感に変わる。居たたまれなくなった源二郎は逃げ出した。

初めての逃走は大量の敵でもなく、強い敵でもなくただ自分の心から逃げ出すことだった。

その日から真田源二郎の懊悩の日々が続く。憧れ焦がれた英雄の功は万骨の上に成り立っていると思うと憧れと嫌悪が入り混じる。とにかくむしゃくしゃするのだ。何をしても世界が鈍色にしか見えない。血も、人も、空も全てが鈍色だった。

源二郎は城を脱け出し山に引き籠った。飽きるまで駆け、疲れるまで刀を振るい、腹が減れば山菜や獣を捕る。

どれだけの日々が過ぎただろうか。ボロボロの服に伸びきった不精髭と髪。野人と言うにふさわしい格好の源二郎は唯一格好に似つかわしくない刀を構える。

今までも連れ戻そうと来た家臣を脅し逃れてきた。斬り合いもした。山での無意識な荒行は源二郎を逞しくしたが胸の内は変わらない。変わらぬ苛立ちに震える源二郎は落ち葉を踏みしめる音を聴く。

二足の生き物、熊か、或いは人間か。

音が近づいてくる。源二郎は刀を抜く。幾多の斬り合いを潜り抜けたソレは些か限界が近い。

姿を現したのは人間だった。浪人の格好をした男の顔を見ようとしたが笠で見えない。源二郎は声を張り上げて問う。

「お前は真田が手の者か！！」

「俺を見忘れたか、源二郎？」

笠を取った男を見て源二郎はアツと驚きの声をあげる。実の兄、真田源三郎その人だった。

「あ、兄上。一体何用得？」

「決まっていよう。源二郎、お前の事だ」

「俺は、俺は武士というものに愛想が尽きたのです！　俺は、此

処で浮世と縁を切り生きます」

「源二郎、だとしても筋を通せ。父上と母上としっかり話しをしろ」

「俺は城には帰りません！ あんな所に……」

「伊助に話を聞いたぞ。大方、戦を神聖視していたのだろう？」

「……」

「戦は汚い。だが、時に美しい事もある」

「分かりません、兄上。俺には分からない」

「汚いだけのものは無く、美しいだけのものも無い。そういう事だ」

源三郎は力チリと鯉口を切り、スラリと刀を抜き正眼に構える。

「さて、久々の兄弟喧嘩と参るぞ」

「目を覚ましたかの？」

身体中に走る鋭い痛みに一瞬で意識がはつきりする。見覚えのある部屋だ。

「雲長殿がお主を背負って駆け込んできた時は驚いたわい」

好々爺然とした笑いを浮かべる華陀が針を打つと痛みが少し引いた。

「此処は漁陽か……皆は？」

「太守殿に首桶を届けに行った。多分明日にでも正式な謁見があるじゃろ」

「そうか……明日までに動けるように出来るか？」

「お前は自分の傷がどれ程重いか分かっているのじゃろうな？」

「出来るのか、出来ないのか。どっちだ」

「出来る。じゃがな、痛いぞ」

「構わん、頼む」

散々だった。治療も痛い。愛紗の疑問を含んだ視線も痛かった。儂父のことは巧く誤魔化した。なんとなく言いたくなかった。まだ決着は着いていないのだ。

「ほら、幸村。肩を貸すからこっちにこい」

「ああ、すまないな」

愛紗に肩を借りて庁へ向かう路を歩く。傍には伯珪が暗い顔で歩いている。劉備は亡くなつた沙陀族の家族のもとを回つてから部屋に籠つて出てこない。そしてこれから、言い訳三昧の謁見がある。面倒な、と王基は重く息を吐く。戦の一番厄介な後始末である。太守の世辞を聞き、ようやく本題に入る。

「して、王基よ。兵はどうしたのだ？」

「賊との戦で大半が討ち死にし、残りの者にはご融資頂いた物質を与え故郷に帰しました。勝手な振る舞い平にご容赦を」

「ふむ、そうか、そうか。いや、よくやってくれたぞ。褒美をとらす」

やけに機嫌が良い。もっとネチネチと嫌味を言われると思っていた王基は拍子抜けだった。しかも褒美までくれると言うのだ。裏があるかと疑うが分からないことをいつまでも考えても仕方ない。

「ならば、天馬を頂戴したく」

「天馬？ 帝より賜つた暴れ馬か。良いだろう。乗りこなせるのならば持つてくがよい」

退出していく王基を見送り太守はほくそ笑む。やっと中央に帰れるのだ。

今朝来た使者の話を聞いて有頂天だった。だからこそ大判振る舞いしたのだ。太守は華の都を脳裏に描き夢を見る。残酷な現実には食

散らかされるまで

異様な重圧を感じる。豪華絢爛な厩舎に負けない風格を備えた巨馬が入り口に立つ王基と愛紗を視ているだけなのに、だ。

「見るからに素晴らしい馬だ。こ奴と駆けたらさぞ気持ち良いぞ」

「だが、歓迎されていないようだぞ？」

「だからこそ口説く！」

「口説く……餌付けでもするのか？」

「いや、餌付けで懐くとは思えん。とりあえず服を脱ぐ」

「よし！ わかつ……なに？」

「だから、脱ぐ。うむ……腕が動かないと脱ぎにくいな。愛紗、脱がしてくれ」

可哀想に頭がオカシクなってしまったのか、と愛紗は溜め息を吐きながら王基の頭を叩いてみる事にした。
ガンツと無防備な王基の頭頂に拳を落とす。

「ぐおっ 痛いぞ」

「ああ、すまない。それで、何故、脱ぐんだ？」

「知らないのか？ 男子たる者恥すべき所は欠片もないと裸一貫で示すのだ。脱がねば始まんぞ」

「馬鹿か！ 脱いだら終わりだろう！？ 恥を知れ！」

「そんな恥は知らん！」

愛紗は道德や倫理で説き伏せようとしたが王基の詭弁には敵わず、お互いの大切な何かを賭けた論争は王基の勝利に終わった。

「見れば見るほど素晴らしい馬だ！」

愛紗の手を引き、王基は無垢な少年の様に目を輝かせて赤毛の巨馬に近づいていく。

「幸村……何故私まで裸にならなければいけないんだ！？」

王基に牽かれてない方の腕で乳房を隠しもじもじしながら股間を隠そつとしながら叫ぶが、王基は意にも介さず答えを紡ぐ。

「何故って、腕が使えないからな。手伝ってくれないのか？」

「手伝うが……だからといって」

「先ずは今までの人間とは違うと思わせねば口説けん……見る、両耳が俺に向いていて尾が上がっているだろう。あれは俺に興味を持っているが緊張もしている状態だ」

ゆつくりとゆつくりと近づく。目線は逸らさずに声を掛けながらゆつくりと近づく。

鼻先まで近づくと巨馬は静かに首を下ろした。

「愛紗、首を撫でてやってくれ」

愛紗は柔らかく梳くように撫でる。静かに時は流れる。

「なあ、ここは何も視えないぞ。雄大な山脈も、広大な海も、果て無き地平も、だ」

巨馬は不思議そうに王基を見つめる。

「それにな、知っているか？ 風は歌うんだぞ。春は陽気に、夏は豪快に、秋は穏やかに、冬は寂しげにな」

それは巨馬には縁の無い世界だった。移動は常に檻の中で稀に馬場で走るだけだ。

「どうだ、俺たちと共に来ないか？ 家の厩舎はここより手狭だが、寂しくはないぞ」

巨馬は絶対に背に人を乗せないと決めていた。だが気付くと乗りやすい様にと脚を曲げていた。

「幸村……今後口説くのは禁止だ」

「なっ 何故だ？」

「……言わないと分らないのか？」

大した顔じゃない癖に不思議と引き込まれる様な魅力がある。不覚にもドキリとした愛紗は一先ず王基に釘を差す。もしも自分の知らない所で、どこぞの女をこのように口説く様を想像して言い知れぬ腹立たしさを感じる。

「わかつ……た。とりあえず今はこ奴に乗ってみようじゃないか」

「その前に服と馬具だろう。まったく、手間の掛かる」

そうは言ってもどこか満更じゃない表情で王基の世話を焼き始めた。

大通りを抜けて城門をくぐり原野に出る。背に乗る二人はゆっくりと巨馬を歩かせる。馬の口には轡は着いておらず、ただ背に鞍が着いているだけだ。太ももの動きだけで御す。少しぎこちないがいずれは慣れるだろう。

「そういえば名を決めてなかったな。愛紗は何がいいと思う？」

「うゝむ、確か残月と言う馬を飼っているのだろう？ ならば朱月はどうだ」

「あかつき、か。なら少し捻って暁だな」

暁、暁と呟いて馬腹を蹴る。並足だった暁は走り出した。風を裂き、地を抉り疾走していった。

日中であるにも関わらず公孫伯珪は宿にいた。だが自室の前でうろうろと百面相をしては頭を抱えている。

長いことそうしていたが、埒があかないと伯珪は部屋に入る。そして圧倒された。

椅子に座っているだけなのに呑まれる。まるで大空に包まれた気さえた。

「あつ　伯珪ちゃん。どうしたの？　変な顔して」

「げ、玄德だよな、アハハ。いや、礼を言いに来たんだ。助けてもらった後はバタバタしていたからな」

いつもと変わらない玄德だ、と安堵して礼を述べる。劉備はただ首を振りうつつ向いた。

「伯珪ちゃん、私ね。旅に出ようと思うの」

「えっ……」

あまりにも急な話に二の句が継げない伯珪に劉備は理由を告げる。

「今回ね、色んな事あったでしょ？ 私は大して役に立たなかったし、逆に足を引っ張ったかもしれないけど……気付いたんだ」

何を？ と伯珪は口にだせなかった。部屋を包む様な黒にも白にも染まらない深い深い蒼が見えた気がした。

「どんなに世の中が荒れようと手を携えられれば解決出来るんだって。だから、私は色んな人に会いたい。色んな、想いや考えに触れて継を創りたいって思ってるんだ」

「本気、なんだな？」

「うん。盧先生にも病が治ったら話すつもり」

「そうか。分かった！ 私も協力するよ」

「ありがとう、伯珪ちゃん！」

「あゝ その、なんだ、白蓮でいい」

「うん、私も桃花でいいよ」

目と目を合わせて笑う二人。それはまるで花が咲いたかのような笑みだった。

幾日が経ち漸く薬の材料が届いた。華陀と華児は直ぐ様に解熱剤を調合し、劉備たちに渡す。

「聞いた話では今流行りの病じゃろう。薬を飲ませたならば安静に療養すれば治ろう」

「ありがとうございます！ この御恩は……」

「医者への恩の返し方は唯一つ。健康に長生きすることじゃ。それでいい」

「はい……本当にありがとうございます」

劉備は一礼して華児に治療されている王基の前に立つ。

「王基さん、私は決めました」

「そうか。精々頑張れ」

簡潔なやり取りに周囲は首をかしげたが王基と劉備は微笑みながら別れの挨拶を交わして会話を終えた。

踵を返して部屋を出ていく劉備を見ながら王基は懐かしさに浸った。一皮剥けた彼女は太閤様によく似ていた。醸し出す雰囲気には笑い方まで見事に似ていた。彼女一人では乱世の露と消えるだろう。だが二兵衛に匹敵する智者を抱え、七本槍を手に入れたならば

「何を笑っているんだ？」

「ふふつ いや、な。随分と化けたと思ってな」

「確かに、彼女は変わったな。優しい水溜まりのようだったのが、大海原になった」

「巧い例えだ、華児。俺はどうだ？」

「む、お前は……そうだな。炎だ。昼はなんの役にも立たんが、夜には大活躍だな」

「ふむ、炎か。夜は近いかな？」

「最早夕暮れだ。洛陽を見たか？ 足元があれば他も推して知るべし、だ」

「やれやれ、朝は遠そうだな」

「だが、立ち止まれん」

「違いないと苦笑いする二人を嘲笑うかのように陽は高々と中天に昇っていた。」

二頭の馬が駆ける。赤と黒の毛をなびかせて赤い馬には愛紗と王基

が黒い馬には華兒と華陀が乗っている。既に漁陽は出ていた。冀州を通り黄河を渡り青州に入る予定だ。駆けていると見覚えのある男が立っていた。腿を絞めて暁を停まらせる。

「赤欖か！ どうした？」

「渡したいものがあつてな」

そう言つて赤欖は革の手袋を王基に渡す。

「なんだ、これは？」

疑問を浮かべるが赤欖は着けてみると笑うだけだった。仕方なく王基は手袋を着けてみる事にした。肘付近まで覆う手袋をかざしていると赤欖が指笛を鳴らす。

すると空を滑るように王基の手袋めがけて降りてくる。腕に衝撃が走り傷が少し痛んだがそれよりも尚興奮した。

腕にいたのは鳥だ。頬には髭状の班紋、頭部は黒く、身体上面は青みがかつた黒で下面は白い。

「鷹、いや鷹にしては小さい。隼か！」

「空の覇者だ。こいつの主は勇者がふさわしい。沙陀族からの贈り物だ。貰ってくれないか？」

「ならば、ありがたく頂戴いたす」

「それと……困った事が出来たならいつでも頼ってくれていい。我らは漢民族は嫌いだが……戦友は大好きだ」

「なれば、俺にも頼っていい。あとは、そうだな。俺は真名で呼べ。幸村だ」

「いいのか？　俺は返すべき真名を持ち合わせていない」

蛮族に真名を許すなど普通の漢民族からしたら狂気の沙汰だ。だが、王基には関係ない。心許した友であれば良いのだ。

「構わん。またいずれ逢おう。さらばだ、友よ」

隼が空に昇り赤い馬は駆け出した。続くように黒馬も駆けていった。赤櫓はその背を見送る。影が見えなくなるまで

く太史慈さんの嫁入り修行く

「いいですか？　まずは口調からです、子義さん」

「わかつ……分かりました、王婆様」

「これからは乱暴な口調は禁止します。破れば……分かってますね？」

「は、はい！ 勿論です！」

「次は料理です。あの子も多少はできますがあの子の育った味を知るのには悪くないでしょう」

「はい！ よろしくお願いします」

嫁と言うのは大変だ。王基が旅立ってから安岐は深く思い知った。母の看病に嫁入り修行。大変ではあるが辛くはない。逆に母の役に立っているのが嬉しいし、好きな男の為に何かするのは楽しい。自然と溢れる笑みを止められない。大好きな弓の鍛錬も夜にしか出来ないが夜目も鍛えられるし王基も同じ空を見てるのかと思うと心が仄かに暖かくなる。

「……貴方が悪いんですからね」

変わってしまった。口調も心も。あの男が、王基が変えてしまった。王基がいないと生きられなくなってしまったのだ。責任はとってもらおう。

夜の闇の中弓に矢をつがえて弦を引く。ギリギリと最大まで引いて止める。

「ですが……もし、もしも他の女になびいていたら

」

弓から弾け、飛び出した矢は闇に消えていく。

「
」

安岐は矢を確認する事なく家に向かい歩き出した。

矢は的の木の板の中央を貫き真つ二つに割っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4150r/>

恋姫†無双～緋将伝～

2011年9月13日23時10分発行